

上山市牧野遺跡

1975

上山市教育委員会

序 文

上山市牧野遺跡は、縄文中期の遺跡として多くの土器片や石製品が出土し、とくに三脚土製品が出土することでは、全国的にも重要視されている遺跡であります。

このたび遺跡の一部が工場適地として開発が行なわれることになりましたが、事業主との円満な話しあいのもとに開発される区域について現地調査が行なわれました。

本調査は、上山市が山形大学柏倉亮吉名誉教授を団長とする牧野遺跡調査団に委託して行なわれましたが、調査の結果は、本報告書のとおり数多くの縄文土器やその他の遺物、埋葬遺跡など出土いたしました。

これは、須川段丘の原始集落の探究だけにとどまらず、学術資料としても価値のあるものと思われます。

このたびの調査にあたっては、連日の炎天のもと、桑園を掘りおこしての作業であり、発掘調査の主任となられた赤塚長一郎先生をはじめ、ご協力くださった諸先生方、地元の方、大学・高校の学生諸君に万腔の謝意を表しますとともに、土地所有者である高橋氏の文化財保護に対する深いご理解にも厚くお礼を申し上げるものであります。

この報告書は、関係各位の総力の結晶であり、牧野遺跡に関する土器や縄文時代における位置づけについて、市民のみなさんにも広く理解される尊い報告書であると信じ、刊行を心から喜びたいと思います。

昭和50年12月10日

上山市教育委員会

教育長 枝松孝一

目 次

序 文

I. はじめに	3
II. 発掘調査にいたるまでの経過	5
III. 牧野遺跡の位置と環境	7
IV. 発掘調査の経過	9
V. 遺 物	13
1. 石 器	13
2. 土 器	23
3. 土 製 品	42
VI. 遺 構	46
VII. 総 括	53
図 版	
・ 牧野遺跡の遠景 (写真)	4
・ 牧野遺跡の位置 (地図)	7
・ 石 器 (実測図第3図～第5図)	19～21
・ 石器の出土状況 (図版1)	22
・ Aイトレンチ北壁セクション図 (第19図)	49
・ 住 居 跡 (第20図)	49
・ 住居跡ピット付近出土の土器 (第21図, 22図)	50
・ 土壇〈その1〉 (第23, 24図)	51
・ 土壇〈その1〉出土の土器 (第25図)	52
・ 土壇〈その2〉出土の土器 (第26図)	52
・ 土器 (拓影 第6図～第13図)	55～62
・ 土器 (実測図 第14図～第16図)	63～65
・ 土製品 (実測図 第17図～第18図)	66～67
・ 縄文中期初頭の土器(1)～(3) (図版2～4)	68～70
・ 土器の出土状況(1)(2) (図版5, 6)	71～72
・ 土 製 品 (図版7)	73
・ 土製品の出土状況 (図版8)	74
挿 図	
・ 牧野遺跡トレンチ配置図 (第2図)	11
・ 石器、剝片、碎片の出土グリッド (表-1)	18
・ 土器分類集計表 (表-2)	38

I、はじめに

“牧野遺跡、の名を聞くと、私の思いの中に浮んでくるのは、見事な中期の縄文土器と共に、独特な形をした土製品のおもかげである。それは三つ足のヒトデのような形をしていて、その表面には、二つと同じもののない文様が描かれている。これが埋もれた積石の間から数々出たのである。今から18年前（昭和32年）の夏、発掘・採収して以来、この特異な土製品の性格と独特な遺跡の性格ということが、私の頭から離れることがなかった。

今年の夏、ここの近接地点が調査されると聞いたとき、実は、18年来の心に懸っていた雲を、今度こそはらせるのではないかと、期待の夢をひろがらせた事であった。

調査のいきさつは、後文に詳述されるように、産友電工株式会社の高橋社長が、その出身地に工場を造ろうと考えた事である。市当局・地元との交渉も、誠意ある当事者の話合いでまとりがつき、その予定地内に遺跡が確認されることから、遺跡の調査を行うこと。その調査費は原因者が負担すること等の案件が、円滑に片附いた。そしていよいよ調査を実施したのは50年の盛夏。8月の9日から16日までの8日間である。

たまたま、時が旧暦、盆に当っておるための人手不足があり、更に何十年ぶりという高気温で、寒暖計は連日33度以上を記録した。調査のメンバーは、来る日も来る日も、超人的な努力を重ねなければならなかった。参加メンバーは、赤塚・阿部・大類・高橋・中山らであり、他に臨時の応援もある。

三脚土製品をふくむ夥い出土遺物については8月一ぱいをかけて整理し、続いて、実測図、写真をととのえ、報告書作成の準備を進めた。本文に見る通り、数名の分担執筆であるが、その編集には赤塚が、また、校閲指導には柏倉が当たった。この間に、川崎利夫、加藤稔氏らの協力援助をいただいた。

末筆ながら、発掘調査の遂行における組織とメンバーを記して、関係各位のご配慮とご苦労とに、深甚の謝意を表わしたい。

調 査 団

団 長 柏倉亮吉（山形大学名誉教授）

調 査 員 （主任）赤塚長一郎（山形大附中）

阿部昭彦（山形大生） 安食英司（山形大生）

大類幸子（山形大生） 高嶋良弘（山形大生）

高橋千鶴（山形大生） 中山芳昭（山形大生）

長沢礼子（山形大生） 川崎利夫（天童四小）

調査補助員 井上 哲（地 元） 久保田一夫（地 元）

五十嵐昌夫（地 元） 木村正喜（地 元）

稲毛宗之(日大山高生) 太田順一(日大山高生)
川合正嗣(日大山高生) 川合真行(日大山高生)
工藤弘志(日大山高生) 佐藤恵治(日大山高生)

事務局

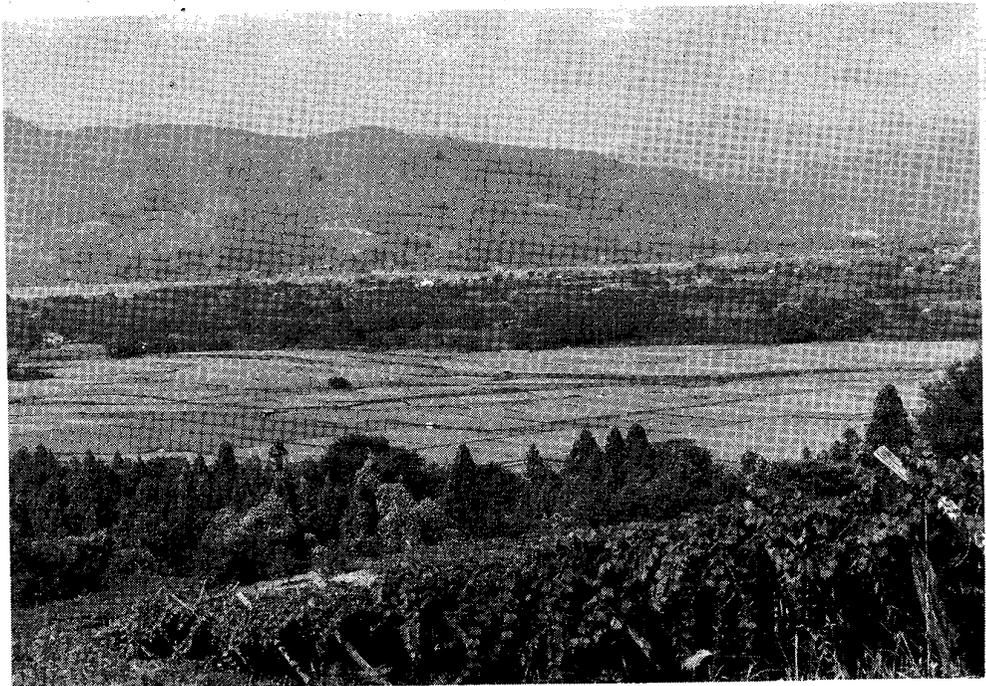
(教育委員会)
一柳悟朗(社会教育課長) 庄司諒三(次長)
佐藤行伸(係長) 斎野ゑい(主任)

協力

上山市、上山市文化財調査会、上山市郷土史研究会
上山市史編纂委員会、産友電工株式会社、牧野部落有志

(編集製本の都合上、V 遺物のうち、2.土器に関する図版等(第6図～第18図 図版2～図版8まで)
は本文末に集録した。)

牧野遺跡の遠景(写真中央、高位段丘畑地内にある。南から北を望む)



Ⅱ 発掘調査にいたるまでの経過

上山市大字牧野字原2513番地付近の遺跡については、地元の古老の方々の話から推察して大正末期から昭和初期には矢の根石を採集しており先住民の居住地であったろうと考えていたらしい。昭和32年7月～8月の調査までは遺跡の範囲や地点等については明確でなく、大字牧野字原から石器等が出土するという程度の把握のしかたであったらしい。

昭和30年代に入り、牧野遺跡周辺のサーベーターの結果、三脚土製品が出土することや、畑耕作中に多量の土器片が出土していること、石製品も出土していることが判明し遺跡の範囲と地点がほぼ確認できた。その結果、特に遺物が多量に出土する牧野遺跡A地点を学術的に発掘調査を行った。この調査が昭和32年である。

昭和32年の発掘調査団員（団長柏倉亮吉山形大学名誉教授）にとっては、牧野遺跡は1地点だけでなく2地点に分かれることが、ほぼ推定されていた。この地点を現在はB地点とよぶことにしたい。現在のA地点及びB地点も縄文中期大木7a～8a期の遺跡で、時間的な大差はないだろうと考えていた。

さて、昭和32年の発掘調査及び関連する問題についての当時の研究結果によると、(1)

- ① 牧野遺跡A地点は縄文中期大木7a、7b、8a期の遺跡であるが特に7b期の遺物が多く中期初頭の遺跡として重要視された。
- ② 当時三脚土製品は山形県のほか新潟、福島、宮城県の一部でわずかに発見されていたが、その出現時期及び分布範囲など不明であったが牧野遺跡を中心とした研究から、出現時期は中期初頭から。範囲は東日本（北海道除く）と推定された。
- ③ 三脚土製品の用途については、形態と土偶・三脚石器など関連遺物、出土状況などから、土偶に似た護符的宗教的遺物で実用物や利器的なものではないだろうと推論された。
- ④ 牧野遺跡の遺構については、包含層の前後の層内に礫が自然に含むが、遺跡内においては何らかの人工的配置があると推定された。特に埋葬か、あるいは三脚土製品や土偶との関係で出土状況が問題にされた。
- ⑤ 出土遺物は土器片及び完形品、土偶、三脚土製品、石鏃、石匙、石皿、凹石、耳栓、耳飾りなどであった。
- ⑥ 土器については広口の深鉢や浅鉢の中でも舟底形や隋円形の形と大木7a、7bの文様に注目された。その結果は昭和37年度の「遺跡地名表」や山形県史「考古資料篇」、「上山市史」（別巻上）等にも取上げられてきた。

昭和49年8月上山市教育委員会は、上山市大字牧野字原地内が工場用地になる可能性があるということから、庄司社会教育課次長・斎野主任・赤塚巡回調査員らと現地調査を行った。工場誘致には、地元民の希望もあり、上山市当局や関係諸機関との話しあいも進行し、工場用地と埋蔵文化財（A、B地点）が直接係わることになった。そのため上山市教育委員会の

とりもちにより、昭和50年6月誘致される産友電工株式会社の高橋久吾社長及び上山市教育委員会社会教育課長、庄司次長、佐藤係長、斎野主任、地元代表者、赤塚巡回調査員らが再び現地調査（工場用地の広さ及び規模、配置等）を行った。この現地調査によって牧野遺跡A、B地点が用地内に含むこと、建築物及び工場用地内道路が遺跡にかかることが判明したため、文化財の保護という立場から話し合いを行った。会社側及び地元の方々も文化財の保護の精神に全面的に賛同され、建築物の配置を再考され、遺跡としての規模の大きいB地点は緑地帯として完全保存していただくことになった。A地点の一部が道路用地になる予定。ただA地点の中央、遺跡の中央から西によったところは調査済み（昭和32年の調査）であるため、残る部分は少ないと推定された。この少ない部分の一部が道路にかかる予定である。そのため、その部分12×14メートルの桑園（2513番地）を発掘調査し、記録保存につとめることになった。

なお 会社側は発掘調査の期日や調査方法、埋めもどし、図面提供に関し調査団の都合に全面的に協力して下さったことをはじめ、調査期間中の訪問など誠意ある態度に、調査団として特に感謝申しあげたい。

さらに、上山市教育委員会が中心となって市当局、地元協力者、文化財調査会等一丸となって対処されたことは、調査がスムーズに進行しただけでなく、文化財の愛護思想の深さによる賜と考えさせられた次第である。

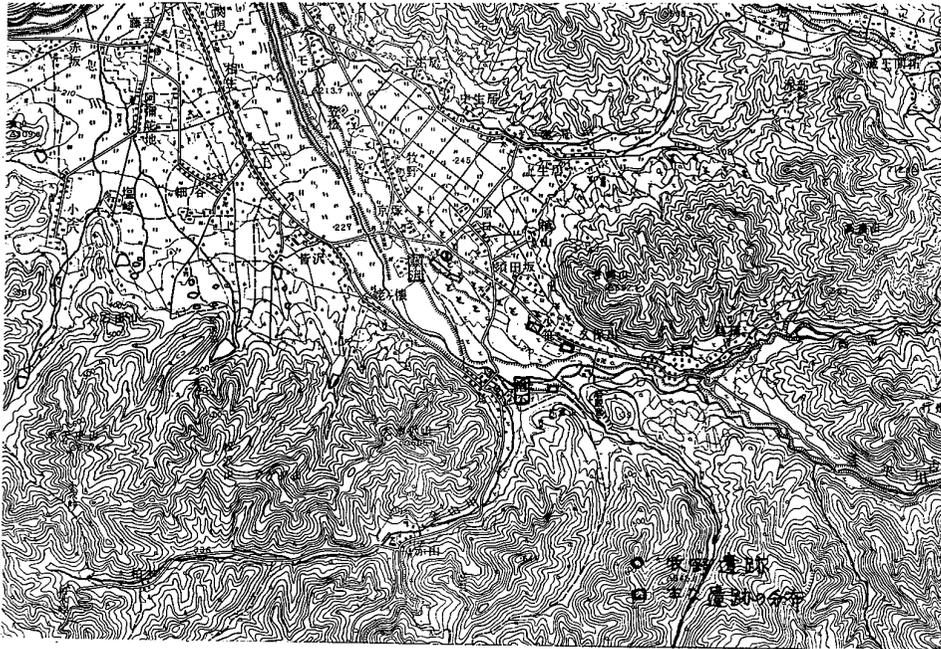
(1)赤塚長一郎「山形県上山市牧野遺跡の調査略報」山形考古 2号 昭和33年

Ⅲ 牧野遺跡の位置と環境 (第1図参照)

山形盆地内の最南端に上山盆地がある。上山盆地は、蔵王山麓に接する東端と北端でちぢむ三日月形の小盆地である。最長径約12キロメートル、中央の最大巾約4キロメートル、菖蒲川や萱平川、金山川を集めた須川が東から北方に向って貫流し、山形盆地の中央で最上川に注ぐ。上市市街地周辺が最も低く、海拔約175メートル、こゝから東へ行くにしたがって高くなる。上山盆地の東端に近い大門、菖蒲付近では海拔300メートルになる。須川は少くとも上山盆地内の東半分では扇状地を形成していると同時に、段丘を形成している。牧野遺跡はこの盆地の東部中央にあり、低・中・高の段丘のうち高位にある。上山駅から南東の方向約6キロメートル畑地になっている高位段丘のうち、大字牧野から東が畑地になり、牧野から西と生居川の間は水田地帯になっている。中・低位段丘の多くは水田地帯である。

牧野から東部の段丘の発達したところには数多くの縄文遺跡がある。特に、牧野から京塚・藤沢・須田板・檜下・小笹・久保川・大門にかけたところに多い。縄文遺跡のうち、中期大木8b期のものが最も多い。

第1図 牧野遺跡の位置



(国土地理院 1:50,000地形図) 「上山」による

牧野遺跡もこれら縄文中期の遺跡群のうちの一部で古い時期の方である。前にも記したように牧野遺跡のうち、今回の調査はA地点の一部である。この地点から南西へ約100メートル隔てた所にB地点がある。さらに、A地点から南の方、高位の段丘から中位の段丘に近いところにC地点がある。B、C、地点とも遺跡の範囲が広く、少なくとも20×30メートルはあると考えられる。高位の段丘から中位の段丘に移る段丘壁（比高約10メートル）を、土地の人々は「ママ」とよんでいるが、この地では湧水があり遺跡も多い。

A地点の発掘中にも、山鳥・キジが飛び舞うほど鳥類の多いところだという感じがする。発掘地点の北側では戦前まで水が湧きでていたという。冬期間には野うさぎがでて、木の芽の被害がでるといふ。

敗戦前や開発が進まない時代には原野があり、水も豊富で野の幸も多く、鳥類やけだものも多かったと古老はいふ。四方は山に囲まれ、北東には蔵王連峯が連なる。こうした環境の中に、牧野遺跡をはじめ、多くの遺跡が分布している。

IV 発掘調査の経過 (第2図参照)

遺跡は、上山市大字牧野字原2513番地の畑地である。(現在高橋善三氏所有)前記「発掘調査にいたるまで」に述べた通り下調べ期間が長く、かなりいきわたった調査である。

発掘調査団の編成や発掘調査のための諸準備等についても何回か打合わせ、遺漏なき調査運びになるよう心がけてきた。以下12×14mの狭い土地の発掘であるが、日誌にしたがってその主な実態の一部を記してみたい。

8月9日(土) 快晴

午前8時30分上山市教育委員会に社教課長・庄司次長・佐藤係長・斎野主任・赤塚調査団員らが集合、小型トラック、ライトバン、乗用車を利用してテント1張(2×3間)発掘用具一式、記録用具、整理箱、その他の機器を現地に運ぶ。牧野遺跡まで約6km直ちにテント設営、用具のとりほごしを行い発掘にそなえる。

午前の休憩後10時30分から発掘予定地の古木の焼却や雑草の刈取りを行う。工場予定の話が昨年からあったため桑木の間に雑草が一面繁茂していた。

午後(1時)も雑草を取除き、桑木の成木を残すだけとなり、ある程度見通しができたため東西14m南北12mの畑地に2m四方のグリットを設定した。

グリットは東から西へA～Fと命名し、北から南へイートと名づけた。その結果北東の隅のグリットはAイとなり西南隅のグリットはFトとなる。

午後の休憩後3時30分頃には、Aイ・Aトでセクション掘り、Aハ・Aホでも発掘をはじめ、Aハでは土器片及び凹石1個が発見された。第1日目は社教課長・庄司次長・佐藤係長・斎野主任・赤塚調査団員、井上哲・久保田の両氏(地元)、中山芳昭(山形大学生)が当り、そのほか地元の木村正喜氏らの協力を得た。

8月10日(日) 快晴

8時30分現地集合 日課に基き8時50分まで発掘用具を200m離れた木村定雄氏宅から運び、準備を整えミーティングを行う。本日は山形大学の歴史(考古学)専攻生及び、クラブ員4名(長沢、中山、安喰、高島)高校生5名が追加になったため、これまでの調査経過と今回の調査のねらいと計画、本日の予定等について赤塚から説明し意志のそ通をはかった。

調査はAイのセクション確認、Aハ・Aホ・Aトの調査の進行、新たにBイ・Bハ・Bホの発掘にとりかかる。

Aハ・Aホ・Aトでは第2～3層が縄文中期の大木7B～A式の土器片が大量に出土した。Bイでは柿の大木の掘起しに苦勞する一方、各グリットとも桑の成木が2～3本掘起すのに苦勞する。来訪者、地元牧野部落木村正喜氏外5名、上山市文化財調査員佐竹徳太郎氏ら3名。

8月11日(月) 快晴

調査用具の準備、本日の調査予定のミーティングを9時までに完了し、調査にとりかゝる。ミーティングでは昨日のAイのセクションによる包含層の確認や、A・Bのグリッド中発掘グリッドの出土状況から第2・3層が遺物包含層と断定し、Bイ、Bハ、Bホ、Cイ、Cハ、Cホ、Dニ、Fニ、Fホ区の調査にとりかゝる。

各区とも桑木の取除きに苦勞しながら第1層(耕土層)をはぎ、第2層の上部では浮いた土器片を採集しながら包含層に達している。

午前中注目をひいた遺物ではCイI層下部～II層では三脚土製品が出土したことである。

午後になりFニ及びFホでも三脚土製品を採集した。特にFホでは小石が円形に近い状態で出土した上部、第1層下部または第2層の中から出土している。地表面下50cmの所である。

Bイ区では土偶片、その他では石器及びチップ等もかなり採集された。

調査団も前日の高校生、山形大学生、赤塚らのほかに地元から五十嵐正夫氏、川崎利夫氏(午前中)らが応援にかけつけてくれた。

午前午後と木村、井上氏ら地元の好意的なスイカ差入れ、来訪者6名、高松葉山温泉の佐藤清四郎氏は調査者の勞をねぎらう手拭(15本)差入れ方々の訪問であった。子供達も学習かたがた参観に来てくれた。

本日もこれまで同様、現地で35°以上の熱さで土がかわき地層の判断に苦しむ一日であった。

8月12日(火) 快晴

午前9時まで諸準備及びミーティング。特に調査方法上では連日の乾燥した熱い中での地層確認のため、水をまき地層判断の工夫をこらすこと。夕方にはこれまで発掘された土器を洗っていく計画をたてた。

そのほか三脚土製品に関する問題や縄文中期大木7a・7b・8aに関する特徴の問題を学習し発掘上の参考になるよう心がけた。

本日の調査で目立ったことは、A地区及びCニ、Bイ、Bロ区で第2層を入念に掘り進めたこと、Bハ、Bニ区の石の状態を実測したこと。Fニ区で直径約1mの凹地状ピットを午前中に確認し午後にはその状況をほぼ確認できた。

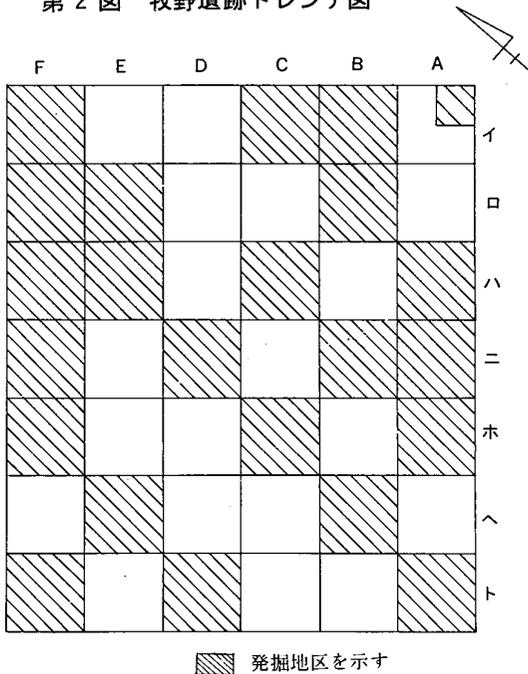
このピットは前日までにわかった円形状の小石があった直下であること、その周辺から三脚土製品が出土していることである。そのほかFイ・Cホ第I～II層上部から耳飾り1個ずつ採集された。

さらに午後には発掘予定地の北西南西にあたるFイ・Fト区を新たに掘りすすめた。

夕方5時頃から本日の出土遺物を洗い、日別、グリッド別・層別にしてトロ箱に納めた。

本日も風がなく35°以上の熱い日で臨時休憩を必要とした。訪問者は朝に地元の方々数名、午後には上市市山田収入役をはじめ、市役所、教育委員会の方々が発天下の中参観された。

第2図 牧野遺跡トレンチ図



8月13日(水) 快晴
 前日までの調査からみて、第1層～第3層までの黒色関係の土層は火山灰であり、第2～3層の中に段丘礫層が含まれているようである。この礫は、時には自然であったり、人工的に利用した場合も考えられるという複雑さがある。土層と礫の二重の難しさを含む遺跡であることをミーティングで確認する。

A・B・C・D・Eの各区で第1～第2層のそれぞれを発掘しな

がらAハ・Aニ区の2層に含む石の実測を午前中にとる。Fイ～Fハ区では第1層～第2層まで進行する。その間Fロで三脚土製品、Fイで黒曜石の原石や頁岩の石鏃などを発見した。Fロ区では一部接合できる土器を採集、Fロ～Fホ、Fト区などでは土器が大量に出土している。

一方、Fニ区ではピットと呼んできたが従来の経過や本日の掘りくぼみ状態から埋葬と考えられるところまで進行した。土器の出土量も多く、土器洗いから埋葬地の調査まで午後6時過ぎまでの日課である。

本日もテント内で35°という高温・無風熱い真夏の炎天下の調査であった。調査に当たったのは川合・稲毛・川合・太田・佐藤・工藤ら高校生6人、高島・安喰・大類・阿部ら山形大学生、川崎利夫・赤塚長一郎らである。

訪問者は産友電工高橋社長のほか地元の方々数名、木村徳太郎氏らである。

8月14日(木) 快晴

朝のミーティングでは、これまでの調査経過をふまえ、発掘予定地内の主なグリットを掘る方向にいくことを確認した。一方、従来から進行してきた各区の中で、Fニの埋葬地やAハAニ、Aホでの住居跡確認の作業も併行してすゝめることにした。

Fニ区では実測作業、Aトレンチでは床面やピット探索のため高橋がまわる。Eトレンチ

のうちロ・ハ・ヘ・Dトレンチ区などでも1層から2層まで掘りすゝむ。

午後にいたり、Eトレンチロ・ハ区を受けもつ阿部や高校生らの所で石組の凹地と一括土器、石鏃の発見などがあり、この遺構の確認にも力を入れる。写真撮影や実測をとりながら進化したところ、土器のセット壇らしいことが判明してきた。夕方の土器洗い一部残る。

調査に当たった方々のうち特に、午前中地元の木村正喜氏、井上哲氏らの応援を得、順調な仕事運びとなった。

訪問者は佐竹徳太郎氏のほか地元の方々7名、上市市収入役ら市役所から3名、地元の木村、井上氏らからスイカの差入れをいただく。

8月15日（金） 快晴

調査員が明日から手不足になることと、予定通りに近い進行からみて、発掘に関する仕事は本日で終了する見当をつける。特に重要な遺構等で確認をしなければならないことは、Eロ～ハ区の土器セット壇の測量、Fロ赤土下のII層の土器の確認、Aトレンチでの床面確認、全体の測量等であることを目標に調査に入る。

この作業は、午前から午後5時半までかかり用具整理等6時までかかる。遺物量が多く、本日の遺物洗いは後にまわすことにした。

調査者は高校生6人、地元から井上・久保田・五十嵐氏の3名、山形大学生の中山・安喰高島・阿部・高橋・大類ら6名、それに赤塚など16名であった。

訪問者は地元の木村正喜氏、東小学校PTA会長ら地元関係者5名、子供ら4名、老人クラブ員10名。

以上、発掘調査期間中、現場での用具測量器具、記録書類等の保管、遺物洗い用の水等については遺跡近くの井上定雄氏の献身的なご協力を仰いだ。

さらに、特に発掘期間中としては地元の木村正喜氏はじめ、井上哲氏・久保田一夫氏・五十嵐昌夫氏の応援、佐竹徳太郎氏や佐藤清四郎氏らの協力を得たことは、調査を成功裡におさめるうえで貴かったことを記しておきたい。

V 遺 物

1 石 器

本遺跡から出土する剥片、碎片および石器は総数 133点を数える（うち4点は表採品）。石質はほとんど硬質頁岩であるが、他に玉髓2点、黒曜石2点を出土している。これらの玉髓や黒曜石は4点とも剥片であり、石器ではない。以上の133点のうちわけは剥片74点、碎片24点、石器35点であり、そのパーセンテージはそれぞれ55%、19%、26%となっている。また、剥片の55%にあたる41点は使用痕、もしくはわずかな二次加工がみられるものである。石器のうちわけは石鏃5点、石錐2点、尖頭器1点、搔器2点、両面加工の石器1点、半両面加工石器4点、不定形石器18点、尖頭様礫器1点、石核1点である。

以下それぞれの石器について述べることにする。（第3～第5図、図版1.2参照）

(1) 石 鏃

① これは先端と片方の脚が欠損している。周囲から全面にわたり細かい剝離を加え、鋭利な縁辺を形成している。先端と脚が欠損しているものの、かなり美しい形状を呈している。（長さ3cm、幅2cm、厚さ0.6cm、E一へ区出土）

② これは他の石鏃と比較して、幅がひろく両側縁から先端に到る湾曲がゆるやかである。基部の方が欠損しており、また縁辺はわずかな剝離しか施していないが、錯向剝離手法を用いて実用性の高い鋭利さを有している。（長さ1.8cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、A一ニ区出土）

③ 薄い剥片を素材として、周辺からの細かく、側縁のみの狭い範囲の剝離によって作り出された石鏃である。正面中央は一次剝離面であるが、裏面は自然面、あるいは節理面である。（長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、A一ハ区出土）

④ 上記の①、③さらに⑤とは種を異にする石鏃である。基部に抉りがなく、基部にいくにしたがって厚さが厚くなっていく。また、両側縁から先端にかけての湾曲が直線的で細身である。この意味で他の石鏃よりは鋭利さを感じさせる。（長さ3.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、E一ハ区出土）

⑤ 先端部が未加工の石鏃である。あるいは、抉りのある部分が尖頭部かもしれない。薄い剥片を素材として周囲から大まかな剝離を施している。（長さ4cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、E一ハ区出土）

(2) 石 錐

⑥ 全面に剝離を施しているので一次剝離面は見えないが、恐らく部厚な剥片を素材としていていると思われる。錐部は両側からの急角度な剝離でなされ、断面四角形を呈している。また錐部先端部に使用痕が認められ、わずかに欠損している。

(長さ 3.2cm、幅 1.8cm、E～ロ区出土)

⑦ 台形状の剥片を素材として、錐部にのみ細かな剥離を施している。また、その二次加工は錯角剥離手法によって作出されている。(長さ 3.6cm、幅 3.5cm、B～イ区出土)

(3) 尖頭器

⑧ 細身の左右非対象の尖頭器である。正面の右側縁が左と比較してわずかに張り出している。また、正面には割に規則的で細かな剥離を施し、中央稜線をはさみ、両側から剥離が施されているのに対し、裏面には稜線左側に右側からなされた剥離が認められ、右側にはかなり大きな階段状剥離をなしている。さらに正面と比較して大きな剥離が目につく。尖頭部、基部ともにわずかに欠損している。(長さ 8.4cm、幅 2.3cm、厚さ 1.1cm、F～イ区出土)

(4) 搔器

⑨ 両側縁が平行で形のよい縦長剥片を素材としている。自然面を有する先端部に剥離を施し、その意味で搔器の形態を示す。さらに、先端部には使用痕が認められる。

(長さ 5 cm 幅 1.8cm、厚さ 0.5cm、刃角70° F～ハ区出土)

⑩ 大形の縦長剥片を素材としており、剥片の基部は欠損している。正面の大部分に自然面を残しており、裏面からの大まかな剥離によって刃部が形成されている横形搔器である。この剥離は相当急な角度をもってなされている。

(長さ 6.1cm、幅 5.2cm、厚さ 1.2cm、C～イ区出土)

(5) 両面加工石器

⑪ これは表採品である。素材は拳大の礫と推定され、周囲からの大まかな剥離で整形されており、上方には節理面が見られ、また、下方には使用痕が認められる。断面は部厚い凸レンズ状である。(長さ 6.1cm、幅 3.5cm、厚さ 2.1cm)

(6) 半両面加工石器

⑫ これは所謂「石ペラ」と呼称されるものであり、部厚な剥片を素材としている。裏面から正面への角度剥離がなされている。裏面は正面と比較してあまり加工がなく、わずかな剥離が見えるのみである。(長さ 6.8cm、幅 3.2cm、厚さ 1.1cm、E～へ区出土)

⑬ 部厚な剥片を素材としており、上方は欠損している。恐らく、欠損した部分は尖頭器状、あるいは錐状の形態を示すと思われる。また、正面右下は欠折している。周囲からの整形剥離は大まかであり、急な角度でなされている。(長さ 6.3cm、幅 3.4cm、厚さ 1.3cm、B～イ区出土)

⑭ 部厚で幅広な剥片を素材として不方に抉り刃状の加工が見られる。この部分を除く周辺からの加工はあまり顕著でなく、不規則である。(長さ 6.6cm、幅 4.5cm、厚さ 1.5cm B～イ区出土)

⑮ ⑭と同様の形態を示し、下方に細かな加工が施され抉り刃状に整形されている。正面右には自然面を残し、上方は欠損している。また、この剥片における主剥離面の方に加工が多く見られることは⑭と異なる。(長さ 6.3cm、幅 4.4cm、厚さ 1.3cm、C～ホ区出土)

(7) 不定形石器

⑮ やや幅広な剥片を素材として、先端附近に集中的に加工が施され先端部に使用痕が認められる。その限りでは搔器の機能を有すると思われる。正面の両側二条の剝離痕は階段状剝離でなされている。またこの剥片の打面を見ると稜上加撃で剝出されたものである。

(長さ 5.3cm、幅 2.9cm、厚さ 0.7cm、F一ホ区出土)

⑯ 短冊形の剥片を使用し、周辺に細かく不規則な剝離が施されている。また基部は欠損しており、先端部の自然面を有する部分に急角度な剝離がなされている。搔器あるいは削器の機能を有すると思われる。(長さ 4.9cm、幅 2.5cm、厚さ 0.8cm、A一ハ区出土)

⑰ 幅広く厚い剥片を用い、基部には両側縁から抉りを入れつまみ状に加工している。正面中央に階段状剝離が施されている。周縁に細かな剝離を施し、特に先端部に念入りの剝離が施されている。形態的には石匙に近似しているが、「つまみ」の加工があまり顕著でないことから不定形石器の範囲に入れた。(長さ 4.8cm、幅 5.2cm、厚さ 1.0cm、F一ハ区出土)

⑱ 部厚く石核の調整剥片のような剥片を素材として、正面には二条の樋状剝離が走っている。正面から裏面への打撃による細かな剝離を裏面左側縁に有している。正面には多くの頭部調整を施している。(長さ 4.0cm、幅 3.1cm、厚さ 1.4cm、F一イ区出土)

⑲ 三角形の形状を呈する剥片を素材としている。基部は欠損しており、階段状剝離によって得られた剥片である。裏面には節理面が見える。正面左側に細かい剝離を施しており、機能的には削器あるいは裁断具と思われる。(長さ 2.6cm、幅 3.1cm、厚さ 0.4cm、B一二区出土)

⑳ 短形状の剥片を用い正面右側に正面と裏面の両方向からほぼ直角の角度をもたせて剝離を加えている。頭部調整を施し、さらに先端部は切截されている。

(長さ 3.1cm、幅 4cm、厚さ 0.9cm、A一ハ区出土)

㉑ 盤状の縦長剥片を素材として、先端部に細かい剝離を施し尖頭器状に加工している。あるいは、尖頭様搔器かもしれない。(長さ 4.9cm、幅 2.5cm、A一ハ区出土)

㉒ 自然面を多く残した縦長剥片を素材としている。先端部は欠損している。この剥片は正面に見える二条の剝離とほぼ直角の方向から剝出されたもので、打面転移されている。全周辺に剝離を入れ機能は削器と思われる。(長さ 6.6cm、幅 4.0cm、厚さ 0.9cm、F一イ区)

㉓ 基部は欠損しているので素材は明確ではないが、恐らく縦長剥片を素材としていると思われる。正面右側縁にのみ細かい剝離を加え、削器あるいは裁断具として機能を有すると思われる。(長さ 2.4cm、幅 2.9cm、厚さ 0.5cm、E一ハ区出土)

㉔ 正面において、この剥片とは直角の角度をなして剝離された痕跡が見られることから、恐らく調整剥片であると思われるが、正面右側に節理面、先端部に自然面を有する縦長剥片を素材としており、階段状剝離によって剝出された剥片である。正面左側縁に細かな割に規則的な剝離が施されている。機能は削器と思われる。

(長さ 5.8cm、幅 3.8cm、厚さ 0.9cm、F-I区出土)

②⑥ 表採品である。盤状の縦長剥片を素材としており、基部は欠損している。正面左側縁上方に自然面を有し、左側縁と先端部、さらに右側縁中央部に細い加工を施している。削器の機能を持つと思われる。(長さ 4.6cm、幅 2.7cm、厚さ 0.7cm)

②⑦ 縦長剥片を素材としており、剥片の先端にわずかに自然面を残す。正面左側縁に細かな剥離を施し、裁断具として利用されたかもしれない。

(長さ 5.9cm、幅 1.8cm、厚さ 0.9cm、F-I区出土)

②⑧ 階段状剥離によって得られた楕円形の剥片を使用し、正面左側縁にわずかな加工が見られる。(長さ 2.5cm、幅 3.5cm、A-H区出土)

②⑨ 優美な縦長剥片を素材として両側縁に入念な加工が施している。

(長さ 7.8cm、幅 2.3cm、厚さ 0.8cm、D-T区出土)

②⑩ 縦長剥片を使用しており、基部附近に密で規則的な剥離作業を行なっている。また打面には調整がなされており、一程度度の目的的な意志をもって剥出されたものであること推定される。正面右側縁から先端にかけて使用痕がみとめられ、その限りでは裁断具と思われる。(長さ 7.0cm、幅 3.5cm、厚さ 1.2cm、C-H区出土)

②⑪ 縦長剥片を素材としている。基部は折りとられている。先端部に搔器を思わせる入念な加工が見られる。(長さ 2.4cm、幅 3.2cm、厚さ 0.9cm、C-H区出土)

②⑫ 半円形の横長の剥片を用い、先端部の全周にかけて、割に大まかな剥離が施されている。また基部にも抉り状の加工がみられる。(長さ 2.0cm、幅 4.7cm、厚さ 1.0cm、F-T区出土)

②⑬ 礫の一端を部厚く剥出し、ほぼ全周にわたって交互剥離を入れている。

(長さ 5.5cm、幅 6.2cm、B-I区出土)

(8) 尖頭様石器

②⑭ 拳大の礫を素材として、礫の一端から交互剥離をもって打ち欠き両刃礫器状に加工している。また上方は尖頭器、錐状に剥離を入れている。

(長さ 6.9cm、幅 4.3cm、厚さ 3.3cm、E-H区出土)

(9) 石核

②⑮ これは本遺跡唯一の石核である。自然面を多く残している。一定した打面を持たず、適宜な箇所を打面としている。なお、この石材の剥片は発見されていない。

(長さ 5.3cm、幅 4.5cm、A-H区出土)

以上35点が剥離を駆使して作出された石器のすべてであるが、次にそれらの出土グリッドを表に記すことにする。(表1) これで見ると、本遺跡の発掘範囲において北東側に割に多く出土している。

これまで述べてきた打製石器のほか凹石6点、磨き石1点をも出土している。

凹石 凹石は大別して3類に分類することができると思う。すなわち、以下のようであ

る。

第1類 礫の一面のみに凹状の加工が施されているもの (36)

第2類 礫の二面にわたって、それぞれ1個ないしは3個の凹状の加工が見られるもの、特に4は正面に縦列の連続した2個の、裏面には幾何学的模様の凹状加工を有している。

(37、38、39)

第3類 礫の一面、あるいは二面にわたって凹状の加工を施しているものの、磨き石としての利用にも供されたと思われるもの。(40、41)

磨き石 不定形的な円礫を用いており、正面、側面、裏面において磨った痕跡が認められる。また正面右下は人工によるものとは認められず、何らかの自然的原因によって崩れ落ちくぼんでいるものである。(42)

考 察

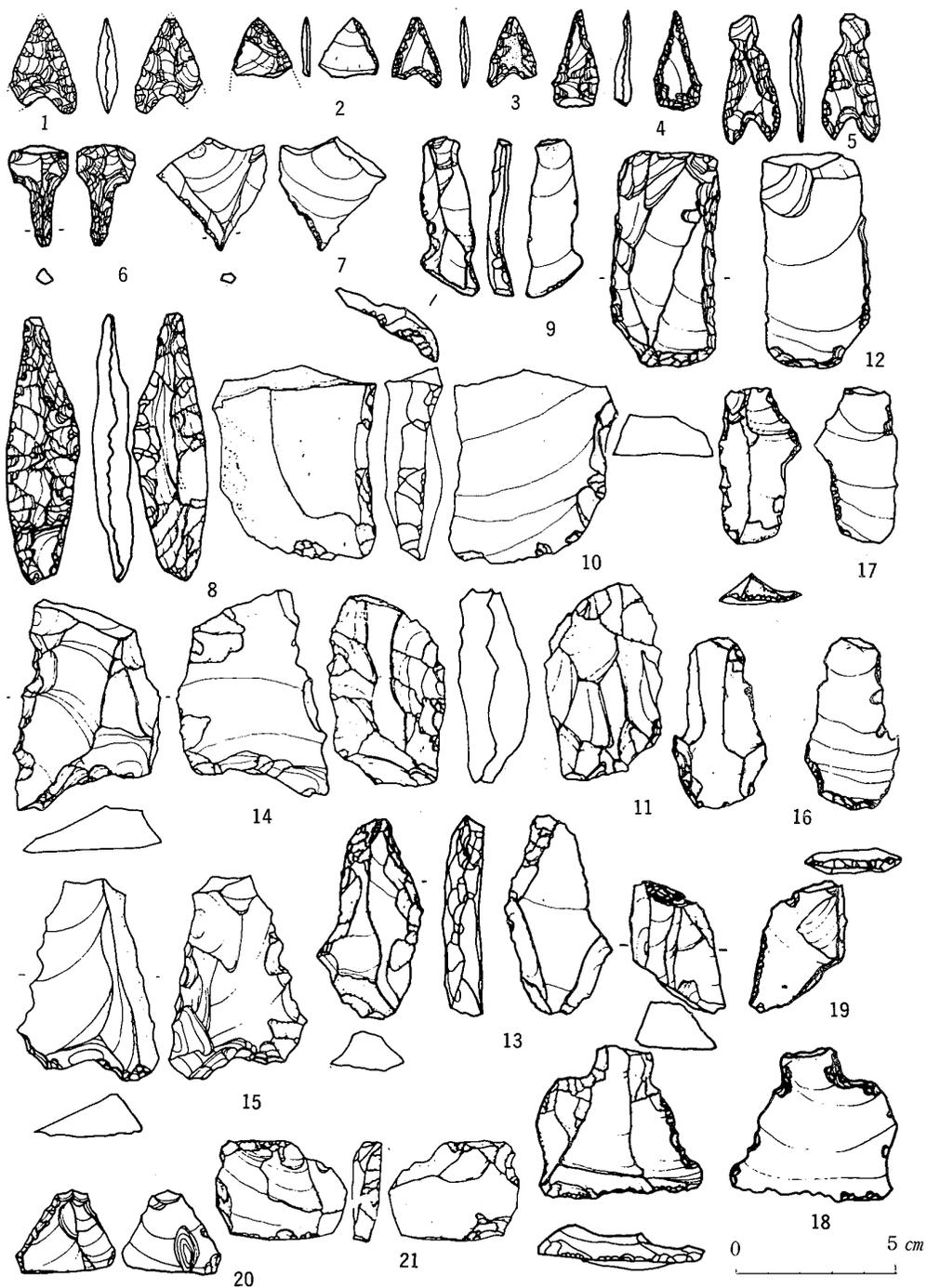
それぞれの石器について主に形態的な説明を為してきたが、より直接生産用具たる石器の性格を知るには、その用途を知ることが不可欠であろうと考える。しかし、こうした機能論的な石器へのアプローチは、現在においてまだ未開拓の分野であることは否めない。すなわち、石鏃や石錐、尖頭器、搔器等は、言うまでもなく、矢じり、穿孔器、槍先、あるいは銛先、鞣器というような機能は知られているが、両面加工石器、半両面加工石器、不定形石器などの機能は知られていない。特に不定形石器は、いずれも剥片の一側縁、あるいは両側縁にわずかな加工を施しているのは共通しているが、その素材なる剥片の形状はまちまちであり、概して定形的であるとは言い難い。すなわち、目的とする機能に対して素材たる剥片の形状は問題ではなく、一側縁、あるいは両側縁に見られるわずかな剝離を入れた石器としての機能がより重要であると考えられる。しかし、こうした不定形石器の明確な機能については現在のところ確定的ではなく、断定することはできないが、切截器あるいは削器としての機能性を能性を与えても大過ないと考えられる。次に尖頭様石器については、その形態、使用痕から推察すると穿孔具となるかもしれない。石核は数多くの剥片を剥いだ後の残核である。さらに凹石については、発火具あるいは木の実の粉碎具などが考えられ、磨き石は木器や骨格器製作の台石であったと考えられる。

また、本遺跡は、河川に近いにもかかわらず、漁撈用としての石錘や土錘が一点も発見されていないのは興味深く、今後の課題となるであろう。

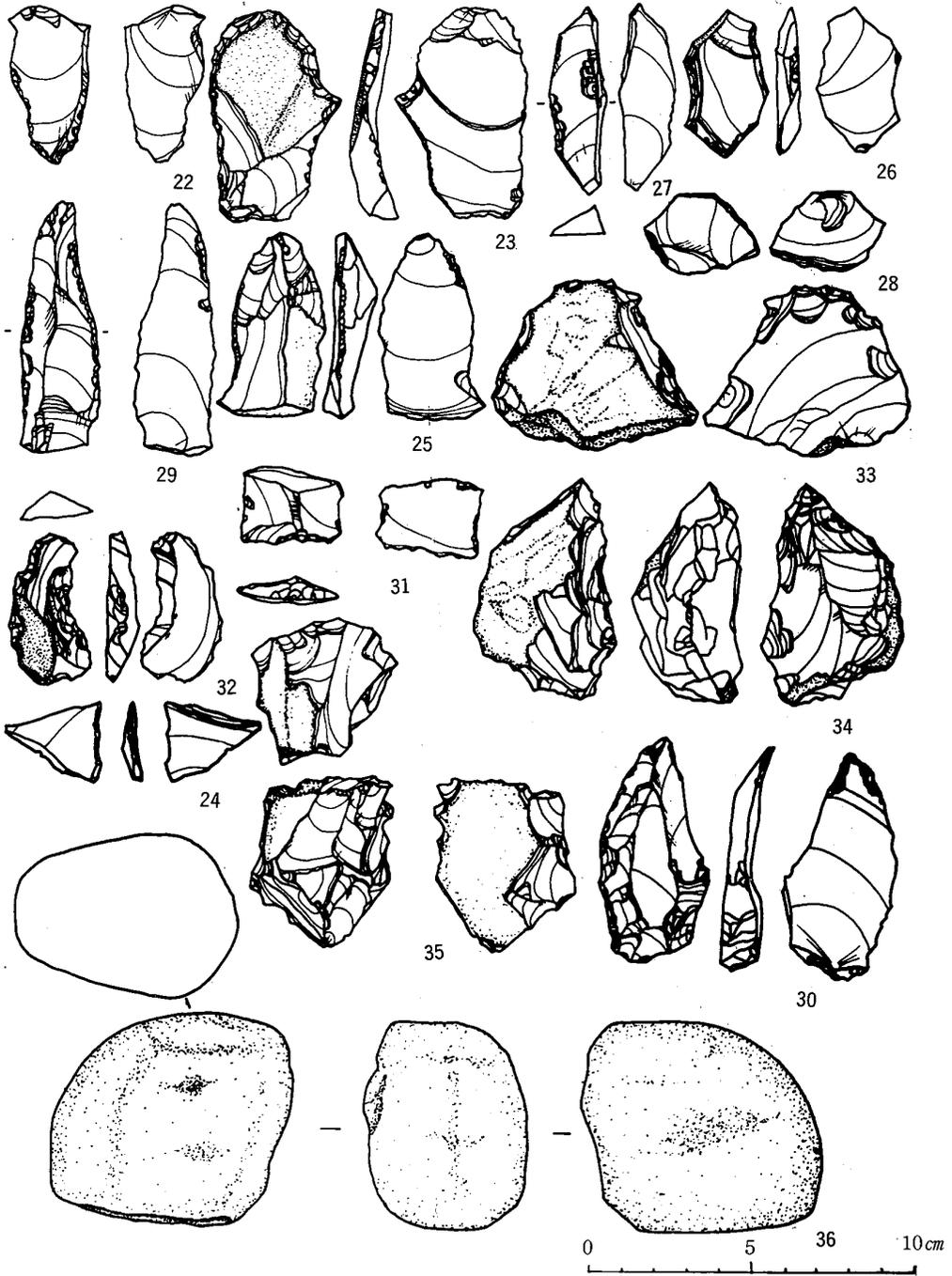
表-1 石器、剥片、碎片の出土グリッド

		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	へ	ト
A	石器			5	1			
	剥片	1		8	3			
	碎片			5	3			2
B	石器	4						
	剥片	8			8			
	碎片	4			3			
C	石器	1				3		
	剥片	3				1		
	碎片					3		
D	石器							2
	剥片							1
	碎片							
E	石器		1	5			2	
	剥片		9	2			1	
	碎片		1					
F	石器	5	10	2		1		1
	剥片	6	2	7		1		3
	碎片							

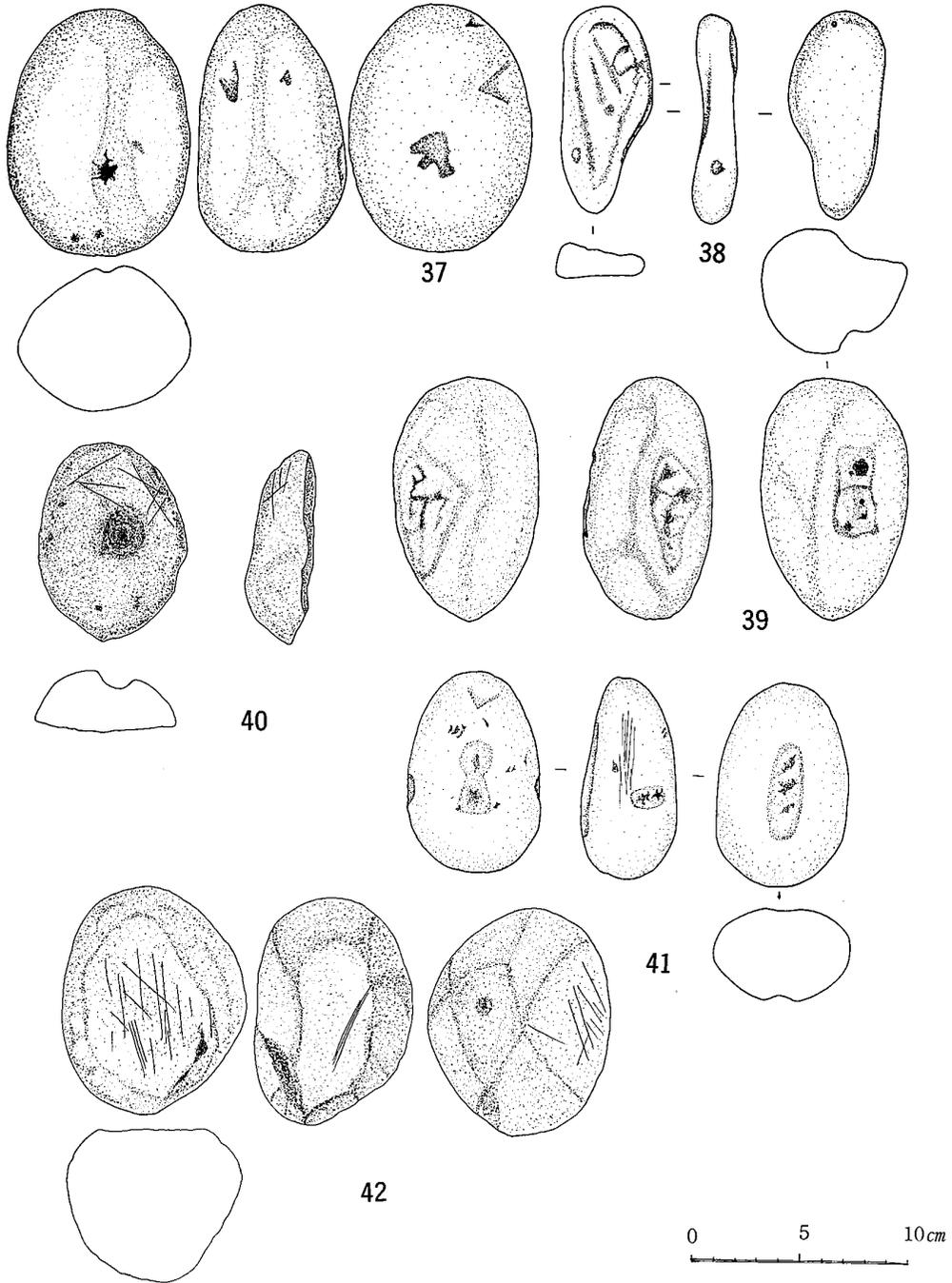
第 3 图 石 器



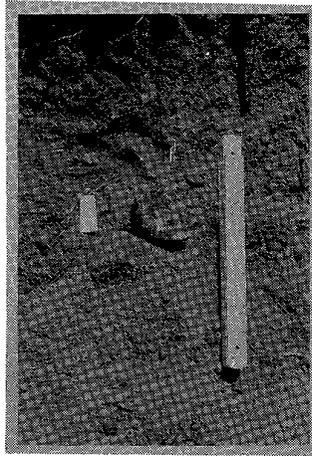
第4图 石器



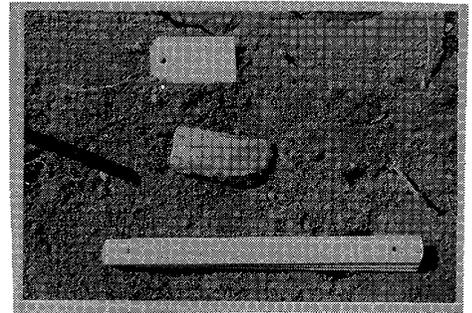
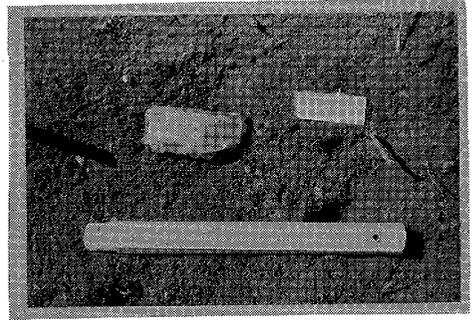
第 5 图 石 器



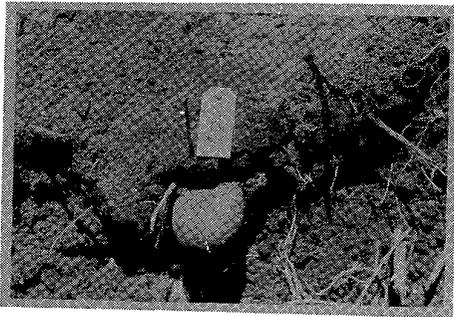
図版1 石器の出土状況



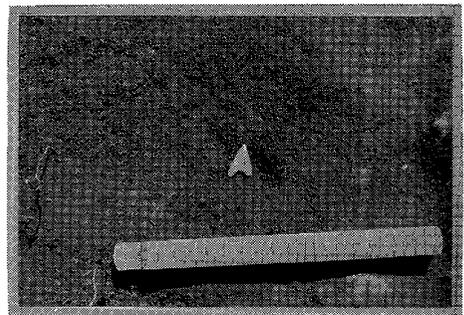
Fイ区 出土黒躍石剥片



⑫ E一へ区出土



③⑥



① E一へ区出土

2 土 器

(1) 土 器

今時の発掘調査より得られた土器は、破片総数で約 6,000片、底部片から推測して 300個体以上に及ぶと考えられる。なお各グリッド出土土器総数は別表(表1)に示した通りであるが補足的に付け加えると、いわゆる折り返し口縁を有する土器群は、無紋、LR・RLの斜行縄紋に一括分類したため、その数量関係は、(表-2)の中では不明である。そこで改めて確認すれば、当然口縁部資料に限られる訳であるが、50数片を数えた。

遺物は第1層下部から第2層にかけて包含されていたが、層序による区分は不可能であり、各層位に見られる土器群の型式にも大差が認められなかった。そのため、ここでは、器形、文様構成、施文具、形成技法などによる分類によらざるを得ない。以下土器を10群に大別し、さらに細別して説明を加える。(第6図~第16図、図版2~図版6参照)

注()内の最初の数字は第○図の○を示す。

第I群土器(第6図)

折り返し口縁を持つ土器群を一括した。これらの土器は、施文具、又は器形により二つに大別され、さらに文様構成により21に細別される。編年的位置づけとしては、いわゆる下小野式併行の大木7a式との間に包括されよう。これらの土器の胎土には石英砂がほとんどの土器片に多量に認められる。焼成はさほど良くなく、色調は明褐色、暗褐色、黄褐色などが多い。器内面は、へら状工具により、緻密に整形されるのが普通である。

1-a類(6-1、2、3)

口縁に約2~3cmの折り返し部を有し、その範囲にLR横位回転施文を持つ。また、体部には同一原体による縦位回転施文や、綾絡文等が見うけられる。口縁はほとんどが平縁で、まれにきざみを有するものもある。器形は、円筒深鉢が多い。

1-b類(6-4、5)

基本的にはa類と同一である。口縁部にRL横位回転施文を有し、体部に同一原体による縦位回転施文を見る。器形は、口縁部がやや開くか又は直上する円筒深鉢形で、器内面の整形の良好なものがある。

1-c類(6-6)

口縁折り返し部にRL原体を、斜位、縦位に回転施文し、体部にLR縦位回転文を見る。器形は、平縁の円筒深鉢形であろう。

1-d類(6-7、13)

口縁折り返し部に、みがきを加えて無文帯とし、頸部以下体部にLR縦位回転施文を有する。器形は、平縁の円筒深鉢を呈するものや、ボタン状貼付を施文し、頸部がくびれて、口縁が外反し胴張りのするものなどがある。(6-13)

1-e類 (6-8)

口縁折り返し部を無文帯とし、頸部以下にRL縦位回転施文を有する。器形には、口縁がやや開くか、直上する円筒深鉢ないし、頸部がややくびれて、多少胴の張る深鉢形等がある。

1-f類 (6-9, 10)

口縁折返し部、頸部以下体部とも器面調整を加えただけの無文としている。器形は、口縁にきざみを加えるもの(6-9)や、小波状を呈するものなどが認められるが、概して器形は平縁をもつ円筒深鉢形が多い。

1-g類 (6-11)

口縁折り返し部を無文帯とし、頸部以下体部にRL横位回転を、数段施文している。器形は、頸部がややしまり、口縁が外反する深鉢形を呈すると思われる。また口縁、口唇にかけてヘラ状工具による整形が著しい。

1-h類 (6-12)

口縁折り返し部を無文帯とし、頸部以下体部に、LR縦位回転文や結束による綾絡文を施文する。器形は、平縁の円筒深鉢形と思われる。

1-i類 (14-2)

口縁折り返し部に、横位のRL回転を数度に渡って施文し、頸部に整形を加えて無文としている。体部には、縦位にRL原体を長く一気に施文し、また、結束のある特殊な縄紋原体を用いて綾絡文を併用している。色調は暗褐色で、焼成は良く、内面の整形もよい。器形は、口縁が直上する円筒の深鉢である。

2-a類 (6-14)

口縁折り返し部にRL原体の縦位併列圧痕を施文し、折り返し口縁下端部を棒状工具により、沈線状に整形して、体部との密着をはかっている。体部には、LR縦位回転施文が見られる。器形は、頭部がしまり、口縁がくの字状に開く深鉢形を呈すると思われる。

2-b類 (6-15)

折り返し口縁に、RL原体を横位押圧により3~4条配している。頭部にも数条同一原体による同様な文様を認めることができるが、詳しくは不明である。口縁は、平縁もしくは、小波状を呈すると思われ、また口縁内側にも8mm~10mmの折り返し部を有している。

2-c類 (6-16)

口縁折り返し部(3.4cm)に、3条のRL横位圧痕文を有し、段状の頭部にも一条の同一文様を配している。体部は無文である。なお、この土器の外面には著しい炭化物の付着が見受けられる。

2-d類 (6-17)

丸みをおびた折り返し口縁部に、RL縦位圧痕を併列に施文し、頭部には、同一原体による一条の横位圧痕文を配している。また体部には、LRの縦位回転施文が見られる。

2-e類 (6-18)

口縁折り返し部にR L横位圧痕を2~3条もしくはそれ以上平行に施文し、頸部以下体部に、R L縦位回転施文後、単独に約4 cm等間に、綾絡文を配している。器形は、口縁がくの字状にやや開き、胴張りのする小形の深鉢と思われる。

2-f類 (6-19)

口縁折り返し部に、L R横位回転施文を有し、頸部以下体部にもL R横位回転施文を配した後、頸部にR L原体を弧状に二状対で、押圧施文している。また、器内面の口縁と頸部との間で、整形され、くの字状の段状を呈する。

2-g類 (6-20)

口縁折り返し部(推定約3 cm)に整形を加えた後、L R横位圧痕を台形状に2状配している。頸部以下体部には、L R縦位回転施文の後、綾絡文をも加えている。器形は口縁がくの字状に外反している。なお器内面の調整は良好である。

2-h類 (6-21)

口縁折り返し部は無文帯にしており、2個の小波状突起部を有している。頸部には、R L横位圧痕文を2条平行に配し、体部は、ていねいな器面調整を加えた無文としている。

2-i類 (6-22)

口縁折り返し部は無文帯として整形を加えたのち、二条の浅いU字状の沈線を平行に配している。頸部以下体部には、R L縦位回転施文がみられる。器形は平縁円筒深鉢と思われる。

2-j類 (6-23)

口縁折り返し部(1.8 cm)に刻線を縦位に併列に配し、頸部にも同一施文具で、横位に施文している。器形は、口縁部が小波状を呈する小形の深鉢であろう。

2-k類

口縁折り返し部を器内面に有するもので、体部とも無文である。

2-l (9-1)

口縁折り返し部を広幅に形成し、粗い整形が加えられただけの無文帯としている。器形は、くの字状に突出する胴張りの深鉢形を呈し、体部には、R L縦位回転施文をしたのち約4 cm等間に綾絡文を配している。

第II群土器

いわゆる爪形文、刺突文、押し引き文(角押文)等を主体文様とする土器群を一括した。ここでは爪形等の施文具により7つに大別し、さらに文様構成により17に細別する。

1-a類 (7-1)

口縁部は、折り返しの形成によって無文としている。また、口頸部との間に段を形成する。頸部には、細い半截竹管と爪形の組合わせ文様を用いて5段配し、体部にも、頸部と同様の施文具で斜位、縦位に配されるらしい。また地文として斜縄文が先に施文される。器

内面の整形は良好で緻密である。色調は暗褐色で胎土に多量の細い石英砂を含んでいる。

1-b類 (7-4)

口縁等は不明である。地文としてLR縦位回転施文の後、半截竹管による平行沈線と数段(2段以上)の平行沈線間をC字状の爪形で満す。胎土には石英砂粒が混入され、色調は暗褐色を呈し、焼成は良好で、器内面の整形も良好である。

1-c類 (7-14)

口縁から頸部にかけて無文地に3条以上の隆起線を平行に配し、隆起線を竹管でえぐり出すようにC字状の爪形を施文する。色調は暗灰褐色で、器内面の調整が良好である。胎土には、石英砂の混入が著しい。口縁内部は「く」の字形に隆起している。

1-d類 (7-8)

口縁部が波状につき出し、直下に二条のLR横位圧痕文が平行に配される。また体部には竹管による沈線とその間をC字状に満す爪形が2段以上配されている。地文は器面調整の横なでがみられる無文としている。胎土には、石英砂の混入が見られ、焼成は良い。色調は明褐色である。

1-e類 (7-2、7-3)

口縁等は不明である。沈線と平行竹管沈線とC字状の爪形で文様が縦横に構成されている。(7-2)色調は明黄褐色で、焼成はさほど良くない。胎土には白っぽい石英、半透明の石英等の砂粒が著しい。

1-f類 (7-6)

口縁部文様として竹管を斜位から刺突することによって円文に近いC字状の爪形文を列点状に2段に渡って配している。頸部は不明であるが、横位の一条の沈線が認められる。胎土には石英砂粒が混入されており、焼成は良くない。色調は暗灰色を呈し、器内面は整形されている。

2類 (7-5)

口縁上端部に8mm~10mmの隆起線部を配し、RLの撚糸原体を用いて、擬似爪形状に施文している。また口頸部は横なでの整形を加えて無文としている。

3類 (7-7)

細い板状工具を斜位から刺突することでD字形の擬似爪形を三段以上口縁部に配している。器内外面は横なでの整形を加えて、外面では、地文としての無文である点は、1-f類と同様である。胎土には、石英砂粒の混入が多量にみられ、焼成は良い。色調は、暗灰色である。

4-a類 (7-10、7-12、13-16)

口縁等は不明であるが、張り出した口縁下部に、二条の押し引きD字状文が見られる。また、頸部にも2条の押し引き文が見られ、体部には渦巻状に配されている。(7-10)(13-16)色調は赤褐色で焼成が良く、固くしまっている。(7-10)胎土には細い石英砂等の混入が若干認められるが、粘土や胎土そのものが、他の土器とは異質である。(7-12)は、

口縁部に縦位の刻目を並列に配し、沈刻線上に3段の押し引き文、その下に交互刺突文が配され、更に2条の押し引き文が配されている。口縁内側は、くの字形に隆起し緻密に整形されている。色調は黒褐色で、焼成はさほど良くない。

4-b類 (7-9)

口縁に約1cm幅で、RL横位回転施文を配し、直下に、弧状に連続的に2条のD字状押し引き文を配している。文様の組み合わせとしては、隆起線状に粘土紐を貼り付けて、内側に沈線を配し、その楕円状区画内で、左右斜上位から交互刺突文を施文しているなど興味深い資料である。焼成は良好で、明褐色を呈し、口縁内側は、くの字形に整形されている。胎土には、やはり石英砂の混入が目につく。

5-a類 (7-11)

資料は波状部の突端に当る。棒状工具による列点状の刺突文が3段配され、更に沈線区画内においても数段の刺突文が見られる。色調は明赤褐色で、焼成は良くない。胎土には石英砂が見える。

5-b類 (7-25)

本資料も1-a類と同様波状部の突端に当るものである。細めの半截工具によるC字形の刺突による爪形が特徴的である。焼成は良くなく、もろい感がある。色調は明褐色で、器内面整形も良くない。

6-a類 (7-23)

波状部資料。口唇に刻目を有し左右にボタン状の貼付文を持つ。文様は2つの平行する縦位沈線文によって区画され、中央部の平行沈線間を斜位からの竹管工具による刺突文によって満している。沈線文、刺突文は、それぞれRL縦位回転施文の後に配されたものである。焼成はよく、色調は、明褐色を呈する。器内面の整形も良好である。

6-b類 (7-16、7-17、7-18、7-19、7-20、7-21、7-23)

LR横位回転施文後、隆線と沈線による楕円状文様区画を行い、区画内に斜位からの交互刺突文を配する(7-17、19、20)。この刺突文によって、中間部はあたかも波状隆起線文の如く見える。また口頸部に沿って横位に配されるもの(7-16、21、23)等もある。器形は、口縁内側がくの字形に隆起して浅鉢状を呈すると思われるもの(7-19)などがある。焼成は良好で、色調は明褐色、暗褐色であり総じて器内面の整形が良く緻密である。胎土には、細い半透明の石英砂が混入されている。

6-c類 (7-15、7-24)

平行沈線間交互刺突文が、弧状ないしは円状に配されるもので、(7-15)は、口縁は外反し焼成が良く、整形も良好である。(7-24)は、口縁に沿って一段の平行沈線と交互刺突による文様構成が見られ、その下に弧状に同様の文様を配している。焼成は良くなく、風化が激しい。胎土にやや大きめの石英砂粒が目につく。色調は黄褐色を呈している。

7類 (7-13)

口縁等は不明である。体部に横位、斜位の沈線を配し、沈線間は隆起帯となっている。この隆起帯を斜位から2対ずつの棒状工具により刺突文を施文している。焼成は良く、器内整形も良好で緻密である。色調は明褐色で地文としてLRの縦位回転施文の後に上述文様を配している。

8類 (15-6, 7)

口縁が複合的に形成され、頸部がくびれる。また、口縁には一対以上の粘土紐の貼り付けによる山形突起を有している。(15-6)。

文様帯は口縁部に限られ、平行沈線(15-6)

山形沈線(15-7)を配してその間に刺突による円文で満している。色調は明褐色、暗褐色で焼成は良い。胎土には若干の石英砂等を含むが他の土器群に較べてはるかに少ない。

第Ⅲ群土器

撚糸押圧(圧痕)文を主体文様とするものを一括した。(第8図)

これらの土器群は、文様構成により2つに大別され、さらに6つに細別される。

1-a類 (8-2, 3)

口縁は粘土紐を貼り付けて小波状を形成し(8-2)、くびれる頸部はていねいな整形による無文帯にしている。(8-3)は初期キャリパー的な口縁部のふくらみを有している。頸部と体部の区画に横位の細い隆起線を配して(8-2)その間にLR原体を横位に四条施文している。焼成は良好で、明褐色を呈し、器内の整形も良好である。(8-2, 3)。胎土には石英砂を含む。

1-b類 (8-4)

基本的にはa類と同様である。資料は口頸部であろう。体部から隆起させた隆起線区画内に、二条づつのRL横位圧痕文が配され、その間にLrの横位回転施文も見られる。また粘土紐貼り付けによる渦巻状の文様も組み合わせ施文される。焼成その他は1-a類と同じである。

1-C類 (8-1, 5, 6, 7, 10, 13, 14)

口縁の作り出しは折り返し口縁的なもの(8-1)、(8-5)、直上するもの(8-5(8-6)、(8-13)、(9-20)、頸部がしまり口縁の開くもの(8-1)、また3つの刻目を有するもの(8-14)、波状口縁となっているもの(8-7)などがある。基本的には、3~数条の横位の直、曲線状の撚糸圧痕を文様として頸部に配している。色調は概して明褐色で焼成の良いもの(8-6)、(8-14)がある。胎土には石英の混入が見られ、ほとんど器内面の調整が良好である。

2-a類 (8-8, 9, 11) (9-10)

口縁に整形を加えて若干の無文帯を形成し(8-9, 12)、口縁部文様帯としてx字状

(8-9、12)、三角形状(9-10)、連弧文状(8-11)の区画文様を形成し、その区画内に1~数条のL rないしはR I原体の圧痕文を曲線的に配している。また、体部文様の明確に解かるものはないが、文様帯は口縁部だけに限られ、体部はLR、RLの縦位回転施文が綾絡文等と併用されるのが一般的であろう。(14-4、15-5)これらの土器は明褐色、暗褐色を呈し焼成は良い。胎土には、石英砂を含む。

2-b類(8-12) (9-1、2、3、4、5、6、7、8、9、11、12)

これらは口縁部から体部にかけての縦位の撚糸圧痕文と、区画文様としての平行ないし、曲線状に配される撚糸、隆起線文などに代表される。(9-1、2、4、5、6、8、9、18、21)また、竹管沈線(9-7)とも併用されるものがある。体部文様を明確に示すものとして、完形の大浅鉢形土器(15-10)は口縁端に一对のs字状隆起文を有し、口縁部文様帯として、横位の隆起線文区画内で竹管平行沈線を二条配しc字形の爪形文で満している。一方頸部には口縁部文様帯と体部文様帯を区画する竹管による平行沈線が施文され、体部にも竹管による半円状の文様区画内にL r原体による圧痕文が併列に配される。単位文様は4である。

口縁内側には、粘土貼り付けによる連続半円状文が全周にめぐらされる。これらの土器の焼成はやや悪く、もろいものがある。(9-2、7、11)、色調は黄褐色、明褐色が多い。胎土には粗い石英砂、砂粒を含む。

2-c類(9-14~17)

口縁に横位(9-15)、縦位(9-14)(9-16)の撚糸圧痕文を配し、体部に、竹管による平行沈線が縦横に走る。器形は小形の口縁が直上する深鉢形が多いと思われる。

2-d類(9-13、19)

口縁部文様を示すものはないが、体部に、撚糸圧痕による文様を縦位(9-19)、フ字状(9-13)に構成している。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈し、胎土には細い石英砂を含む。

第IV群土器

隆起線と沈線による主体文様を持つ土器群を一括する。これらの土器は、施文具、文様構成により3つに大別し6つに細別する。

1-a類(14-4)(10-1、2、5)

口縁部にのみ文様帯を有する土器で、器形的に波状の把手をもつ大形のやや胴張りのする深鉢形の土器が特徴的である。(14-4)。文様は隆線と1条~2条の沈線によりx字状に構成され交互刺突文と併用されている。(14-4)(10-2)。地文としてLR縦位回転が、口縁から体部に至るまで施文される。焼成は良好で、色調は明褐色を呈し、口縁内側でくの字形の隆起部をもつものが多い。(14-4)(10-1、2)。

30頁 白紙

1-b類 (13-7、10、11、12) (13-10) (13-11) は同一個体

口縁部文様として、一条の横位沈線と沈線山形文とが施文される。(13-10、11)。また、地文としてのRL横位回転施文が見られ、頸部は無文帯としている。焼成は良く固い。色調は赤褐色を呈し、胎土に細い石英砂の混入が見られる。(13-11)は、口縁に菱形に沈線を配している。胎土には粗い石英砂が混入される。

2-a類 (13-2、3、4、5、8、9)

口縁部に無文ないし斜行縄文帯を備え、以不沈線により平行、連弧文等が配される。総じて焼成は良く、整形も良い。胎土には、石英砂を含む。

2-b類 (13-13、15、17)

体部に沈線による渦巻文を有するもので、色調は暗褐色(13-13)、明褐色(13-15、17)を呈す。焼成は良好で胎土に石英等が若干混入される。

3類 (13-18、19、20、21、22、23)

口縁等は不明なため、組み合わせ文様の構成は確かめられないが、体部に2~3条の平行沈線による十字状(13-19)、U字状(13-19、14)等の文様構成が見られるものや、斜行する3条の沈線によって三角形に区画文様を構成するもの(13-21)などがある。地文には、LR縦位回転施文と綾絡文が併用されている。(13-19) 焼成は良く、器内面の成形も良い。胎土には石英砂が混入される。色調は、黄褐色を呈するもの(13-19)、明褐色(13-18、20)を呈するものなどがある。

4類 (13-24)

口縁は不明であるが、体部文様として、斜位からの沈線により矢羽根状の文様を構成している。器厚が1.5cmと厚く、胎土には細い石英砂を混入し、器内面の整形は非常に良好である。色調は、赤褐色である。

第VI群土器 (第22図)

粘土紐による隆起線をもって文様を構成する土器群を一括する。

1類 (22-5) (15-8)

器形は初原的なキャリパー形を示し、くびれる頸部までの間に粘土紐によって、孤状、渦巻状の文様を構成している。地文として、口縁から体部にかけてLR縦位回転施文が見られる。口唇は平らに整形され、器内面の整形もよい。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には細かい石英砂が混入される。15-8は(22-5)と基本的に同一であるが、口縁に2つの小把手状の突出と2つの渦巻状隆起文を見る。体部には、単独の綾絡とLR縦位回転施文が見られる。

2類 (22-4)

器形は浅鉢形と思われる。口縁が平に整形されて、外側へ突き出す。口縁には粘土紐によって、長隋円状の文様を構成する。体部にはLRの縦位回転施文が見られる。

第Ⅶ群土器

口縁を無文帯として、体部に地文としての斜行縄文、綾絡文、無文を持つ土器群を一括する。

1類 (22-1) (14-1)

器形的には、頸部がくの字形にくびれる鉢形土器 (22-1) と、口縁でややしまる深鉢形土器 (14-1) 等が見られる。(22-1) の口縁部形成は折り返し式的である。体部には単独の綾絡文とLR、RLの縦位回転施文が併用される。焼成は良く、器面調整の擦痕が著しい(14-1)。

2類 (14-3)

口縁、体部とも無文とする。器面にはヘラ状工具による横位調整の擦痕が著しい。焼成は悪く、もろくて風化が激しい。色調は明黄褐色を呈す。胎土には粗い石英砂、その他の砂粒を含む。

第Ⅷ群土器

口縁部文様を持たない土器群を一括する。

1類 (11-5, 7)

口縁に若干の無文部分を残して、口縁から体部にかけて綾絡文と斜行縄文を施文している。器形は、頸部がややしまって口縁が外側に張り出しながら直上するもの(11-5)、波状口縁の一部(11-7)などである。焼成は良く固い。器内面の整形も良好である。色調は明褐色(11-5)、暗褐色(11-7)を呈す。胎土には石芸砂を含む。

2類 (22-2)

波状口縁にボタン状貼付文を有する外、地文としてのRL縦位回転文と、単独の綾絡文を数条併用する。焼成、器内面整形は良好で色調は明褐色を呈し、胎土には若干の石英その他の細かい砂粒を含むが他ほどに顕著ではない。

第Ⅸ群土器

口縁、頸部文様が不明な体部地文だけの土器群を一括する。

1類

斜行縄文を一括した。(12-1、2、3、4、5、6)RL、LRの斜行縄文だけの総破片数は別表(表-1)に示す通りであるが、その比は約5:8とLR原体を用いているものが多い。また施文方向は、基本的に縦位に回転施文するものがほとんどであるが、狭い幅で縦長に配するもの(12-2)や数段に渡って横位帯状に施文するもの(12-1、3)などがあり区分される。一方、同一原体を縦横に回転して横に走る羽状を構成するものも見られる(12-4)。

2類 (12-9)

無節の斜行縄文を一括する。単節の斜行縄文に較べて約10分の1と少ない。単節のものと同様左撚りのものが多い。

3類 (12-7、8)

地文として単軸撚糸回転文を施文する土器群を一括した。大木7式前後の中期初頭において県内でも各地の遺跡に木目状の撚糸文が見られる(山形市百々山遺跡、村山市落合遺跡、遊佐町吹浦遺跡など)が、(12-7、8)は明瞭に木目状を呈するかは不明である。量的には22片と斜縄文に較べて非常に少ない。

4類 (11-1~13)

綾絡文、斜行縄文を併用する土器群を一括する。基本的に、回転施文するとS字状に文様が出表するもの(11-1)と、Z字状に出表するもの(11-12)とに区別されるが、それらはまた一段撚り、二段撚りの段階によって、単節(11-2)、複節(11-6)を呈するものと分けられる。さらに、同一原体を1ヶ所(11-11)ないし2ヶ所以上(11-12、13)結束して綾絡文を配するものや、地文に縄文を施文した後、結束部分だけを単独に用いて綾絡文を施文するもの(11-3)など種々のものが看取される。

5類 (11-14-21)

結束羽状縄文の土器群を一括する。

体部資料のみ得られず、口縁等との文様の組合わせが定かではないが(11-15、17、20)は、同一個体である。(11-15、16、18)は、平行、曲線の沈線を伴っている。これらの土器は、焼成や器面調整は良好で、胎土に多量の石英砂を含んでいる。

第X群土器

底部網代圧痕文を有する土器群を一括する。出土底部総数394片の中で約 $\frac{1}{3}$ 以上に網代痕が認められた。本資料による網代の編み方は今までの所(12-10~13)の10種程確認できる。網代は幅が3mmから6mm位までのもので構成され、2本組で作成されたもの(12-15)もあるが経緯とも一本で、経が2本超え、2本潜りの1本送り(12-17)(12-12)等のもが一番多く見うけられる。またいわばむしろ状の圧痕を呈する一群も峻別される。(12-10)(12-11)(12-12)(12-19)。なお詳細は(荒木ヨシ「東日本縄文時代の網代網みについて」物質文化15、1970年、「縄文時代の網代編み」物質文化17、1971年)と比較参照されたい。

(2) 器形に見られる特徴

出土品より器形の理解できる資料は、約10数個体にすぎないが、これらの土器について主な文様と、器形について概観してみたい。

① 深鉢形土器 (14-1、2、3、4) (15-5、6、7、8、9)

時期的に数型式を含む資料であり、一括して取り上げるのは不適當ではあるが、類型別に概略を述べよう。

1類 (14-2)

いわゆる折り返し口縁を有する土器である。

この資料は、前述(第1群1類)土器を含めてそのほとんどが、円筒深鉢形を示すものと考えて大過なからう。底部資料が明確なものは確認できなかったが、下小野貝塚例に見られるような、外側に多少突出する例はほとんど見当たらない。

2類 (14-1)

底部直径の2倍程度の口径を有し、口頸から口縁中程に最大径をもつ。

3類

頸部がくびれ口縁がやや外反する、大形の深鉢である。

4類 (14-4)

4個の大波状口縁を有し、口縁部文様帯として、隆起線と沈線による施文がみられる。胴部はやや張り出して丸みを有す。土器破片の中にも、同様の器形と思われる資料は第III群土器に多い。類例は山形市百々山遺跡などに見られるが、若干の相違がある。

5類 (15-5)

口縁が開く円筒深鉢形を呈し、口縁部に文様帯を有す。

6類 (15-6、7)

口縁部は複合口縁的に形成され、胴部が張り出すものと考えられる。施文される文様も一種特異で、形式的にも古い様相を示すものと考えられる。

7類 (15-8、9)

口縁部が、やや張り出し、隆起線や沈線による文様帯を有する。この資料は阿玉台的な色彩が強い。

② 浅鉢形土器 (16-1、2)

1類(16-1)は、底部が楕円状を呈す。(16-1)、(16-2)共に、底径の2倍程度の口径を有す。これらの土器は前述第III群のものに相当する。

2類 (14-10)

長径60cmを計る大浅鉢である。この時期のものとしては最大のもので他に類例を見ない。口縁には竹管による爪形文、体部には、竹管沈線と撚糸圧痕文などが配される。また1対のS字状隆起文は、大木7b式のメルクマールとされている。(1)

③ その他

明瞭な形で残存するものはないが、上述、深鉢、浅鉢形の他に、幾つかの器形を指摘できる。例えば(8-2)は、口縁がくの字形に外反するものであり、(9-1)等は、頸部が著しくしまる器形を有するものと考えられる。その他器形の大小など種種考慮に入れる必要があるだろう。

註(1) 林謙作「縄文文化の発展と地域性」 東北—日本の考古学Ⅱ 縄文時代 河出書房

(3) 考 察

① 編年的位置づけ

牧野遺跡より出土した多量の土器は、種々の問題を内包している。先ず取り上げるべきは、その編年的位置づけであろう。しかし、先にも述べた如く、発掘調査を通して、これら出土土器群を客観的に位置づけ得るに足る論拠を確認できなかった。いわゆる包含層序出土の土器群であり、少なくとも二面以上あったと思われる生活面は近接し、ほとんど判別が不可能である。そのため、ここでは、消極的ながら隣接諸遺跡および、他地域に類例を求めて、牧野遺跡出土土器群の編年的位置づけに触れてみたい。

別表(表-2)の出土土器破片数(口縁が不明な体部文様だけのものを除いて)を見て行くと、大木7b式といわれる縦横の撚糸による側面圧痕文を有する土器群と、五領ケ台系と思われる。半截竹管ないし、棒状工具による平行沈線、渦巻、孤線文等を有する土器群が圧倒的に多いことが理解できる。したがって牧野遺跡の中核となる編年的位置づけは、これら、第Ⅱ群、第Ⅲ群をもって(東北南半における)大木7b式前後と考えて大過なからう。

第Ⅰ群土器はいわゆる下小野系と言われる折り返し口縁を持つ土器群である。下小野式土器は通例五領ケ台式土器に伴うとされ(註1)牧野においても例外ではない。(第Ⅱ群6、7類)などの土器は五領ケ台系の土器群として、比定されてもよいだろうと考える。さらに、折り返し口縁を持つ一群は多様化されながら次型式に受けつがれるものと思われる。牧野(第Ⅰ群2類)の土器はまさにこれらに相当する。

県内において、これら下小野系の折り返し口縁を有する土器を出土する遺跡は、今までの所、数遺跡(註-2)にすぎないが、既出土土器の検証によってはさらに増大するものと考えられる。次にY字状ないしは、X字状、楕円状等の区画文を有し、区画に沿って、撚糸側面圧痕文や沈線文を配す(第Ⅲ群2類)や、いわゆる角押文を有する(第Ⅱ群4、5類)、三又状の沈刻文をもつ(10-18)(第Ⅳ群)土器などは、阿玉台系の土器ないし、大木系の中で変質を受けた一群と考えられる。

さらに、地文として、単軸撚糸回転文(木目状撚糸文)を有す一群や、撚糸の側面圧痕による爪形文を配す(第Ⅱ群2類)土器は、東北々半における円筒下層、および、上層系の色彩を持つ一群と理解される。このように、一遺跡において、少なくとも近接ないし、併行す

る土器型式が四型式以上にも及んでいる事は、縄文中期初頭における広範な文化的（交易等を含む）交流の一端を示すものと考えられよう。

以上要約、整理すれば、五領ケ台系の施文内容を有する土器群を大木7 a 式に、また阿玉台系の施文内容を有する土器群を大木7 b 式と大まかに理解すれば、牧野遺跡においては、いわゆる下小野式の折り返し口縁をもつ（第Ⅰ群1類）に伴うものとして、（第Ⅱ群の6、7類）（第Ⅴ群1、2類）（第Ⅵ群）（第Ⅶ群）等が上げられ、これらを含めて、大木7 a 式を構成するものと考えられる。これらは先述の通り、五領ケ台式（註一3）に併行する一群として認識されよう。これらは各要素により更に細分され得る。以上牧野Ⅰ式とする。

また、（第Ⅲ群）を主体とする撚糸側面圧痕文系の土器群により、次型式を構成するものと考えられる。即ち大木7 b 式に比定される。（註一4） 以上牧野Ⅱ式とする。

更に（第Ⅴ群3類）などは大木8 a 式期の範ちゅうに含まれるものと考えられる。良好な比較資料として長井市宮遺跡が上げられよう。（註一5） 以上牧野Ⅲ式とする。

② 編年上の問題点

ここで中期初頭土器群の編年上の問題点について、若干の私見を述べてみたい。いわゆる前期末から中期初頭にかけての様相は、東北南半ばかりか、地域においても不明な点が多く、最近になって漸くその資料、知見の増大により、型式の検証と細分化が試みられ始めている。すなわち、関東における、下小野式の検証や、五領ケ台、阿玉台式の細分化また、東北々半における円筒上層b式以降の細分化など、従来までの型式が改正、細分化される趨勢にある。一方県内における、いわゆる前期末の円筒式と大木式の融合形態として認識された吹浦式の問題（註一6）も各知見から疑問を投ぜられてきている。こうした中で、大木型式それ自体のもつ内容についての検証を加え、明確化し得なければ、東北南半（大木文化圏）における様相を把握し得ないのは当然であろう。第一群土器の分析でも明かなように技法と文様の相関や、型式の問題、範型論的な理解と、地域における類型（copy）の抽出、体系化など、総体的な研究の成果を一日も早く期待したい。それによってはじめて、無理のない他地域との比較、検討も妥当なものとして作用するであろう。なお、吹浦式の問題については、

文様変化（範型変化） \supseteq 形態（器形）変化 （註一7）

の援用により、また、大木型式を中心とする東北南半の中期初頭の問題に関しては、糠塚式を含めての検討と、型式学的に大木7 b 式細分の可能性によって対応できるものと考えている。最後に牧野遺跡出土の各土器群を編年的に図示しまとめたい。

	關 東		仙 台 湾	牧 野	(山 形)
縄 文 中 期 初 頭	五領ヶ台	(下小野)	(糠塚)	} 牧野 I	(落合)
	勝坂 I II	阿玉台 I II	大木 7 a 大木 7 b		牧野 II
	加曾利 E I		III	大木 8 a	牧野 III

* 編年表は、基本的に日本の考古学Ⅱ（鎌木義昌）によった。(1965)

註

1. 江森正義、岡田茂弘、篠遠喜彦 一千葉県香取郡下小野貝塚発掘報告—
考古学雑誌 36—3 (1950) など
2. 上山市 小倉遺跡—柏倉、赤塚ら「上山市史」別巻上 遺跡、遺物編 上山市 (1974)
村山市 落合遺跡—柏倉、加藤、赤塚、川崎ら「山形県史 考古資料」資料篇Ⅱ
山形県 (1964)
酒田市 飛島遺跡—同 上
長井市 宮遺跡—同 上
大石田町 笹山遺跡—実見による。
3. 五領ヶ台式の中でも、五領ヶ台Ⅰ式は糠塚例により近く、牧野では、その大半が五領ヶ
台Ⅱ式に併行するものと思われる。
4. 牧野（第Ⅲ群 2類）は、極めて阿玉台Ⅰb式に類似の要素を有する。
5. 柏倉、加藤、赤塚、川崎ら「山形県史 考古資料」資料篇Ⅱ 山形県 (1964)
6. 保角 里志一「所謂 吹浦式土器について」郷土考古 第2号 (1974)
小笠原好彦一「円筒式文化の崩壊とその意義」平重道還暦記念論文集 (1974)
7. 堀越 正行一「原始共同体社会研究の基礎理論」(1971) (単行本)

表-2 土器分類集計表

(A)トレンチ

文様	イ			ロ			ハ			ニ			ホ			ヘ			ト			計	備考	
	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底			
横位捺糸圧痕	1	3					52	12		6	5		17	2					4			102		
縦位捺糸圧痕							13	4		1	1		36								1	56		
交互刺突文							0	0					2									2		
平行沈線文間爪形文							1	3					2	1								7		
爪形文							8	4		2			11								1	26		
平行沈線文	3						28	23		1	29		2	53							4	143		
隆帯+沈線文							24	22			7		9	2								64		
粘土紐・貼付文							2	3			1		1									7		
渦巻文							1															1		
縦位羽状文							0	14			5			14								33		
横位羽状文							1												1			2		
綾絡文							81				53			73						1	8	216		
L R 斜縄文	5						6	138		7	60		7	88							14	320		
R L 斜縄文	1						6	49			13			30							5	103		
特殊な縄文											2											2		
無文		2					10	129		8	71		8	113							12	351		
捺糸文							4														9	13		
無節斜縄文							25			3			17								1	46		
その他不明	7						111			38		3	155								4	320		
底部		2						66			20			35								9	132	
総計																							1964	

(B)トレンチ

文様	イ			ロ			ハ			ニ			ホ			ヘ			ト			計	備考
	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底		
横位捺糸圧痕	11			10						3						9						33	
縦位捺糸圧痕	2	1		4						1	1											9	
交互刺突文	1				1					2												4	
平行沈線文間爪形文	1			2	4																	7	
爪形文	1	1								2					1							5	
平行沈線文	4	8		2						1	14				2	8						39	
隆帯+沈線文	4			3						2	2				7							18	
粘土紐・貼付文	1	3																				4	
渦巻文		1													1							2	
縦位羽状文		1								1												2	
横位羽状文																						0	
綾絡文		29		6						29					18							82	
L R 斜縄文	16			20						1	1				16							54	
R L 斜縄文	16			2	21					1	31											71	
特殊な縄文										1					6							7	
無文	3	56		1	35					2	14				2	68						181	
捺糸文		1								2												3	
無節斜縄文		9			5					10					2							26	
その他不明	29			2	42					43					10							126	
底部			16			8					17					6						47	
総計																						720	

(C) トレンチ

文様	イ			ロ			ハ			ニ			ホ			ヘ			ト			計	備考
	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底		
横位燃糸圧痕	11					4							3									18	
縦位燃糸圧痕																						0	
交互刺突文						1							1	1								3	
平行沈線文間爪形文																						0	
爪形文			1																			4	
平行沈線文	5					2								4								11	
陸帯+沈線文	4												1	6								11	
粘土紐・貼付文																						0	
渦巻文													1									1	
縦位羽状文																						0	
横位羽状文																						0	
綾絡文	1	28				9							1	14								53	
L R 斜縄文		13												3								16	
R L 斜縄文		23				3							3	22								51	
特殊な縄文						1							1									2	
無文	1	36				8							1	3								49	
燃糸文		1																				1	
無節斜縄文		3																				3	
その他不明		3												50								53	
底部			10																			15	
総計																						291	

(D) トレンチ

文様	イ			ロ			ハ			ニ			ホ			ヘ			ト			計	備考	
	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底			
横位燃糸圧痕																					5	4	9	
縦位燃糸圧痕																							0	
交互刺突文																					2		2	
平行沈線文間爪形文																							0	
爪形文																					1	1	2	
平行沈線文										1											6	13	20	
陸帯+沈線文										1												5	6	
粘土紐・貼付文																							0	
渦巻文																							0	
縦位羽状文																							0	
横位羽状文																							0	
綾絡文										1	5											19	24	
L R 斜縄文											3										4	26	33	
R L 斜縄文										1	2											14	17	
特殊な縄文																						2	2	
無文											9											37	46	
燃糸文																							0	
無節斜縄文																						4	1	
その他不明											12											3	15	
底部												3										17	20	
総計																							200	

(E) トレンチ

文様	イ		ロ		ハ		ニ		ホ		ヘ		ト		計	備考
	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底		
横位燃糸圧痕			9		5				1		1				16	
縦位燃糸圧痕			1		2										3	
交互刺突文					2										2	
平行沈線文間爪形文									4						4	
爪形文			3		2										5	
平行沈線文			5								4	35			44	
陸帯+沈線文			8		5	1									14	
粘土紐・貼付文															0	
渦巻文															0	
縦位羽状文															0	
横位羽状文															0	
綾絡文				32	1	53				3	9	106			204	
L R 斜縄文			1	5	5	40				7	5	81			184	
R L 斜縄文			2	17	1	24				3	1	65			113	
特殊な縄文				1		2						5			8	
無文				60	9	36				5	18	164			292	
燃糸文															0	
無節斜縄文				8		6				3	2	29			48	
その他不明				6	13	40						20			79	
底部							25					46			71	
総計															1087	

(F) トレンチ

文様	イ		ロ		ハ		ニ		ホ		ヘ		ト		計	備考
	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底		
横位燃糸圧痕	17		23		1			1	15	3			4	2	66	
縦位燃糸圧痕	1		2						2				1		6	
交互刺突文									2	3			2	2	9	
平行沈線文間爪形文	1		2					1		2					6	
爪形文			1		9		2	1	1				1	1	16	
平行沈線文	12		5	9	1	2				9			4	46	76	
陸帯+沈線文	2		31		4	3			8	9				1	56	
粘土紐・貼付文	3		1		3				1				2	1	8	
渦巻文	1		9												10	
縦位羽状文	1	5		2						2					10	
横位羽状文				1										2	1	4 F-ト折返し口線1.
綾絡文	1	21	1	26		3		8		58			3	40	161	
L R 斜縄文	1	20	5	120		17		1	11	3	60		89	57	384. F-ト折返し口線2.	
R L 斜縄文	1	14		94		14		1	4	1	34		9	78	250. F-ト折返し口線2. F-ニ折返し口線1.	
特殊な縄文				3											3	
無文	2	36	18	66		17		11	5	52			6	87	300 F-ト折返し口線2.	
燃糸文		1		4											5	
無節斜縄文	1			2		5		9		4			2	12	35	
その他不明	31		1	81		2		6		26				40	187	
底部			17		31		4		3		20				34	109
総計															1692	

文 様	地 区 (トレンチ)															計	備 考												
	イ			ロ			ハ			ニ			ホ					ヘ			ト								
	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底	口	体	底		
横位燃糸圧痕																											244		
縦位燃糸圧痕																												74	
交互刺突文																												13	
平行沈線文間爪形文																												24	
爪形文																												58	
平行沈線文																												341	
陸帯+沈線文																												169	
粘土紐、貼付文																												19	
渦巻文																												14	
縦位羽状文																												45	
横位羽状文																												6	
綾絡文																												740	
L R 斜縄文																												991	
R L 斜縄文																												605	
特殊な縄文																												24	
無文																												1219	
燃糸文																												22	
無節斜縄文																												162	
その他不明																												780	
底部																												394	
総計																												5936	

3、土製品

(1) 三脚土製品

今回の調査において三脚土製品は10点出土し、表採品として1点確認された。これらの遺物を類別すると、A類：沈線文、B類：竹管による刺突文、C類：連結刺突文、D類：無文、E類：土器片を利用した三角形状土製品という5類に分けられる。次に各遺物の説明を述べてみたい。

A類（第17図①～③、 図版7 ①～③、⑧～⑩ 図版7 ②）

第17図①は最大厚 2.5cm、現存高（注1） 5.6cmと今回出土のもので最も大きい。表面は曲面で浅い沈線文を施し、裏面は無文でA類に共通して平坦なため、かまぼこ状の断面をなしている。三辺は曲線をなす。これは一旦三角形の形にしそれから三辺を調整し曲線にしたことが裏面のゆがみの線からわかる。焼成は堅緻で石英を少量含む。色は淡黄褐色を呈する。（B-I区出土）

②も厚さが最大のところで 2.3cm、現存高 4.7cmと大型である。図の上部側面は裏面に対して約70度の傾斜をなす面を持ち、山形の沈線が施されている。もう一辺は指で調整されたと思われるくぼみがある。裏面はやはり平坦で無文である。色は明るい淡黄褐色で、焼成は良く、石英を若干含む。（A-II区出土）

③は厚さが最大で 1.4cm、現存高 4.8cmあり比較的大さい。沈線文のある面がやや丸味を帯びていて、裏面は無文で平坦である。側面は指で整えられたようにくぼんでいる。沈線は前例より深く施されている。またやはり石英を含み焼成はやや良好。色は明るい淡黄褐色である。（A-I区出土）

B類（第17図④ 図版7 ⑦⑭）

これはA類に比較して小形化し、最大の厚さが 0.9cm、現存高 3.5cmである。文様は竹管による刺突文で、エプロン状に施されている。図の下部は研磨されている。裏面が内湾し、特に側面はなく丸味をおびている。石英を少々含む、焼成は堅緻で光沢がある。色はより白っぽい淡黄褐色を呈す。（F-I区出土）

C類（第17図⑪）

これは表採品で完全な姿をとどめている。高さ 5.3cm、幅 6cm、最大厚 1.5cmである。石英を少し含む、淡黄褐色を呈し、焼成は堅緻である。全面光沢がある。沈線文と、連結した刺突文の組みあわせの文様を持つ。裏面は著しく内湾している。

D類（第17図⑤⑥ 図版7 ⑤⑥⑫⑬）

第17図⑤は砂を多く含む、焼成が悪く、文様が不明である。脚部の欠損もみられずほぼ完全な姿を呈している。断面はほぼ丸く、裏面はやや内湾している。色は淡黄褐色を呈している。厚さは最も厚いところで 1.2cmで、高さは 3.6cmである。（F-II区の土地の上から出

土している。)

⑥は脚部にいたって極度に湾曲になり、欠損した部分があればまさに三脚台というイメージであろう。側面は切り立っている。石英を含み焼成は良好で色は淡黄褐色を呈す。厚さは最大であり 1.3cmあり、現存高 3.5cmである。(F一ホ区出土)

E類(第17図⑦~⑩ 図版7・④⑩)

第1図⑦は三辺が直線的で三角形形状を呈す。表面には縄文が若干残っていて、裏は無文である。裏面の湾曲や側面を研磨している痕跡などから土器片を利用したことがわかる。石英を多く含んでいて表面が黒味がかって風化し、裏面は少々赤味がかった淡黄褐色で焼成は良好である。厚さは 1.1cmで、高さは 3.5cmである。(A一ホ区出土)

⑧はやや湾曲の急な土器を使用した三角形形状のもので、下部が欠損している。表面は無文で明橙色を呈す。裏面は淡黄褐色でやや内湾している。現存高 2.4cm、厚さ 0.8cmである。石英を少々含み焼成良好である。(E一へ区出土)

⑨も土器片を使用し、三角形形状を呈す。全体的に平坦でほぼ完全な姿をとどめている。表面には条間の広いLR斜縄文が施されている。側面はきれいに削られている。高さは 3.1cm厚さ 0.7cmである。色は淡褐色で石英をやや含み焼成は堅緻である。(F一ハ区出土)

⑩はほぼ90度の頂点を一角に持ち、前例が鋭角のみを有すのに比べて特徴的である。表面は無文で暗褐色を呈す。裏面は淡黄褐色で平坦である。土器底部を利用したものかもしれない。側面は前例と同様、表裏面に垂直に磨られている。ほとんど欠損のため、はたして本当に三角形形状のものかわからない。現存高 2.5cm、厚さ 0.9cmである。砂を少量含むが焼成は良好である。(F一ロ区出土)

(2) 円盤状土製品

円盤状土製品は4点出土している(第17図①~④)。それぞれの施文として、右撚りの縦転斜縄文(①)や左撚りの横転斜縄文(②)半截竹管による2本の平行沈線文(③)磨滅(あるいは研磨)し文様が不明なもの(④)がある。④以外は土器片を打ち欠いただけのものである。①②は焼成良く、淡黄褐色を呈す。③は暗赤褐色を呈し、焼成は良い。④は淡灰褐色を呈し焼成悪い。また、この土器片からだけでは当時のものを使用したのか、前時代のものを使用したのか明らかにできない。

(3) 土 偶

土偶は脚部1点(第18図⑤図版1図②)と板状土偶の欠損欠下体のもの1点(同⑥同⑩)が出土している。

⑤は直径 3.5cmの底を持ち、今回出土した板状土偶とは異質なもののようである。底は平坦でほぼ同筒状にのびる脚部に2本の平行沈線が斜めに施されている。焼成は良く石英を若干含む。色は淡黄褐色である。(E一へ区出土)

⑥は現存高 5.7cmで厚さ約 1.5cmの板状土偶である。右肩の前後に2本の沈線が斜めに施され、腹部にも1本の沈線が施されている。背面には脊柱を表わす幅1cmの沈線があり、腕は肩部で丸くとじられ省略されている。また女性の乳房をあらわす隆起があり、頭部、左肩部、下半身は欠損している。厚さは1.2～1.9cmで、下腹部に最大厚がある。色は淡黄褐色で石英を多く含み焼成は堅緻である。(B-I区出土)

(4) 耳 栓

耳栓は2点出土している(18図⑦⑧ 図版7図⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓ 図版8図①)。

⑦は図からわかるように全体の $\frac{2}{3}$ がほぼ円筒状で、残りの $\frac{1}{3}$ がラップ状に広がっている。大きい円の直径が3.6cmでその面は内湾している。また小さい円の直径は3cmで直径1.8cmの孔を穿っている。この孔は貫通せず途中までである。雲母や石英を少々含み、焼成は良好。色は淡黄褐色を呈する。全体が光滑な感じである。(F-I区出土)

⑧はラップ状に開いた耳栓である。小さい円の直径は1.6cmで直径0.6cmの孔を穿っている。やはり孔は貫通していない。また大きい円の直径は2.8cmでほんの少し内湾している。

⑦ほど光滑さはなく、やや粗雑である。石英を含み焼成は良い。色は淡黄褐色を呈する。

(E-I区出土)

(5) その他

形態からみて、何の部類に属するか不明のものが1点出土している(第18図⑨ 図版7図⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓ 図版8図②)。一見スタンプ状の形態を示すが直径4.6cmの円形の底面は無文である。外湾するくびれの中央よりやや上部に2本の沈線文が施されている。上部は欠損し、下部へかけてラップ状へ広がるところで、底面に貫通する直径約0.5cmの不定形の孔が穿ってある。特別な意味を持つものであろうか。

(6) 考 察

今回の牧野遺跡において確認された土製品について若干の考察を加えてみたい。

三脚土製品については昭和32年の調査(注2)でも確認されているが、今回出土のものは比較的小形のものが多い。この土製品はいったい何に使用されたか興味深いところである。第17図⑤の遺物が土地の上から出土しているということが或る暗示を与えてくれるような気がする。三脚土製品は土偶の変化したものであるという説(注3)なども含めて、マジック的なもの、あるいは宗教的なものだと考えて大過ないものと思われる。時期は、伴出する土器群が大木7b期のものが中心となっていることから、そのころと考えられる。類例の三脚土製品が山形市百々山遺跡でも出土している(注4)。

土偶の中で板状土偶はA類の三脚土製品が出土する付近に出土し、土偶の脚部はB・D類の出土する付近に出土した。これは単なる偶然か、あるいは時間的、空間的な区別があった

のか興味のあるところである。

円盤状土製品は、土器片からの抽出が困難なため未確認のものがさらに多いものと思われる。その用途は土器片錘とも宗教的なものとも言われる（注5）が、この遺跡の特殊性から、より宗教的なものと考えたい。

耳栓は耳朶に孔をあけてはめこみ、耳飾として使用されたと考えられている（注6）。類例の耳栓が山形市百々山遺跡でも確認されている（注7）が、この場合に孔は貫通している。

以上のように、今回の調査はさまざまな問題点を含みながらも、大木7b期における三脚土製品の性格や、円盤状土製品の確認、発生期の耳栓の様相といった新資料を提示してくれたことは意義深いものと思われる。

注

1. 逆三角形に置いた時、縦軸に垂直に平行移動させた時の上端から下端までの長さ。
2. 赤塚長一郎「上山市原遺跡調査略報」『山形考古3号』（1957）
3. 江坂輝弥『土偶』校倉書房（1960）
4. 柏倉、加藤、赤塚、川崎ら『山形県史 資料篇Ⅱ 考古資料』写真481 山形県（1969）
5. 渡部幸子『縄文時代における所謂「土製円板」に関する研究』『福島大学考古学研究会研究紀要 第3冊』
6. 渡部 誠「装身具の変遷」『古代史発掘②縄文土器と貝塚』
7. 前掲(4)

VI 遺 構

昭和37年の調査時にもそうであったが、地層の判別が非常にむずかしい。段丘礫の上に火山灰が推積し、その量は遺跡付近で平均40センチメートルに達している。さらに腐蝕などにより黒褐色化し、耕土層とそれ以下の層の判別がむずかしくなっている。第19図のⅠ、Ⅱ層がそれである。Ⅰ層の中に、耕土層（約20センチメートル）とそれ以外の土層が含まれている。Ⅱ層としたのは、Ⅰ層よりもしまり、粘質がかり時には微砂が含まれるからである。Ⅱ層の厚さは17~18センチメートルで段丘礫を多く含んでいる。このようにⅡ層が薄いため、Ⅰ層の下部にまで礫がまたがっている場合が多い。

Ⅱ層になると礫もあるが茶褐色で砂が多くなりしまりが一層強くなる。Ⅲ層以下は段丘礫層になってしまう。

遺物包含層はⅡ層の上部であるため、Ⅰ層の下部から出土しはじめる。そのため、包含層としての厚さは極めて薄く、礫が混入していることと合わせ、保存状態はよくないようである。こうした地層の中で、遺構として確認できたものに3つある。

1、住居跡（第20図参照）

Aトレンチを中心としたところであるが、Aホ~Aトのグリッドにかけて、直径28センチメートル、深さ18センチメートルのピットがある。ピット付近には次のような土器（第③図参照）が出土している。折返し口縁を有する土器（21-6）（21-5）、沈線と刺突によるもの（21-1）（21-4）、（21-1）は竹管による沈線である。また隆帯を指頭で押圧し山形状を形成するもの（21-5）、隆帯と沈線により文様を構成するもの（21-9）および、燃糸による文様構成（21-8）（21-10）、などがみられ、型的的には小野五領ケ台糸、大木系など、各種のものが混合し、時期を決定し得ないが、広くみるなら大木7b式併行に近いと考えられる。

そのほか、炭化物も出土している。炭化物の範囲はAニ~Aホに広がっている。土器群もAニ~Aホは勿論、Aハのグリッドにもみられる。

この炭化、土器群の出土面はⅡ層の上部にはりつけたようになっており、その面はほぼ平らである。自然礫が多い中で、この面にさゝる石は割合に少ない。そのほか、配石の状況や焼土など何んの遺構もとらえられない。

2、土 塼 その1（第23図参照）

Eロ~Eハ区のⅡ層上部に土器を二個分をセットに置くような施設がある。平面的な形は台形状で、長辺が86センチメートル、短辺が60センチメートル、高さが56センチメートルの形である。中央には左右を分離する粘土帯があり、最上部に棒状の安山岩の石をはりつけている。左右の抗の深さとも36センチメートル、底面の形は角とり長方形、楕円形状をなし、上面よりも底面が狭くなっている。しかも、左右の凹地とも、その面に粘土をはりつけたあ

とがある。凹地の周囲の一部を石でかためたところもある。

この遺構で得られた資料はほとんど大木7b式第24図(25-9)といわれる一群と考えられ、遺構の所産もこの時期と考えられ、。文様的に見れば、撚糸を平行に押捺したもの(25-2)や、撚糸を、隆帯区画内に縦位に押捺したもの(25-6)(25-8)、隆帯により文様構成のみられるもの(25-4)は、キャリパー形深鉢の頭部であろう。また、口縁に沿って隆帯をめぐらし、竹管等工具に爪形を配すもの(25-5)などもあり、ほとんど一時的における所産であると考えられる。

3、土 塚 その2(第4図参照)

Fニ区のⅡ層を円形状に掘りくぼめた施設である。上面で長径1.4メートル、短径1.2メートル、底面では0.8メートルの円形になる。凹地の側壁や底の部に15×20センチメートルほどの石がある。

この施設の上部には、小石がかなり覆っていたり、三脚土製品(第17図)も1個出土している。小石と三脚土製品の関係は明確でないが、昭和32年の調査でも、同様の出土状態が認められている。(1)

これは、墓地的な性格が考えられる遺構であるが、出土した土器は(第26図参照)隆線と沈線によるX字状の文様構成を見るもの(26-1)や、沈線によるもの(26-3)(26-4)撚糸によるもの(26-2)などが、主な内容である。また地文としての斜行線文、綾絡文などの外に、木目状撚糸文を有する(26-5)は興味深い。この遺構はいわゆる大木7b期の所産と考えて大過なからう。

4、考 察

遺構として3つとりあげることができるが、それぞれ、一つ一つとして貴重な資料であるが全体的な構造が立証されない。住居跡にしても、ピット1個と床面だけであり、堅穴式なのかどうか、諸施設はどうなっているのか全く見当がつかない。確かに、炭化物が床面に散在しているが、炉の構造はどうなのか。昭和32年の調査においても同様の問題が残されたが、今回もついに立証することはできなかった。その理由として、地層上の問題と遺構そのものが保存性の弱い簡素なものかどうかということにもひっかかってくる。

それにしても、土器量はかなり多く、三脚土製品や土偶、耳栓、石器などからして、簡素過ぎるキャンプサイトではないとも推定できる。

第3には、第Ⅰ層下部から第Ⅱ層上部というわずかの時代に、住居面(生活面)が1つだけでなく、二・三重と重なりあっているほか、地層上の問題であるが一層明確にしなければならないと考えている。

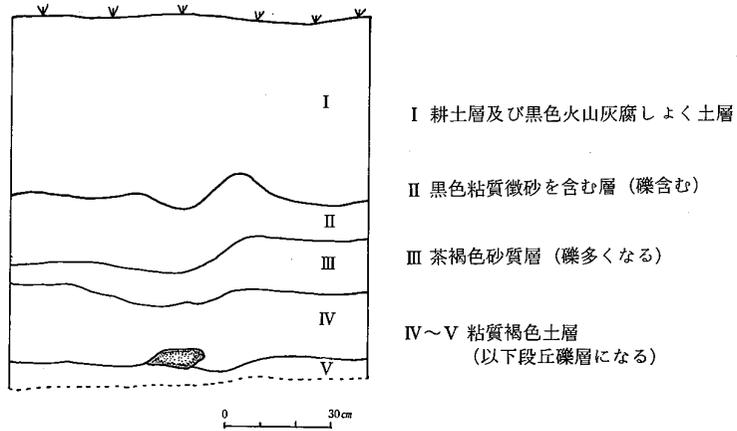
Eハグリッドの土塚(その1)にしても、それ自体は人為的に、大木7b式併行期につくられたが、住居の内か外か明確でない。この土地自体は、片方の凹地から土器が出土しており、土器を安定にセットしておく施設かと推定しているが、確かな証拠を得ていない。ただ、こうした施設は従来の貯蔵穴ともちがいで、1つの貴重な資料であろう。

Fニグリッドの土壇（その2）はいわゆる袋状の貯蔵穴とはちがい、半円形状の凹地で小石が多いなどから推して、墓拡でないかと推定される。これについても、大木7b期としては山形県内では類例はなく、この時代に新たな解明の手がかりを得たのである。

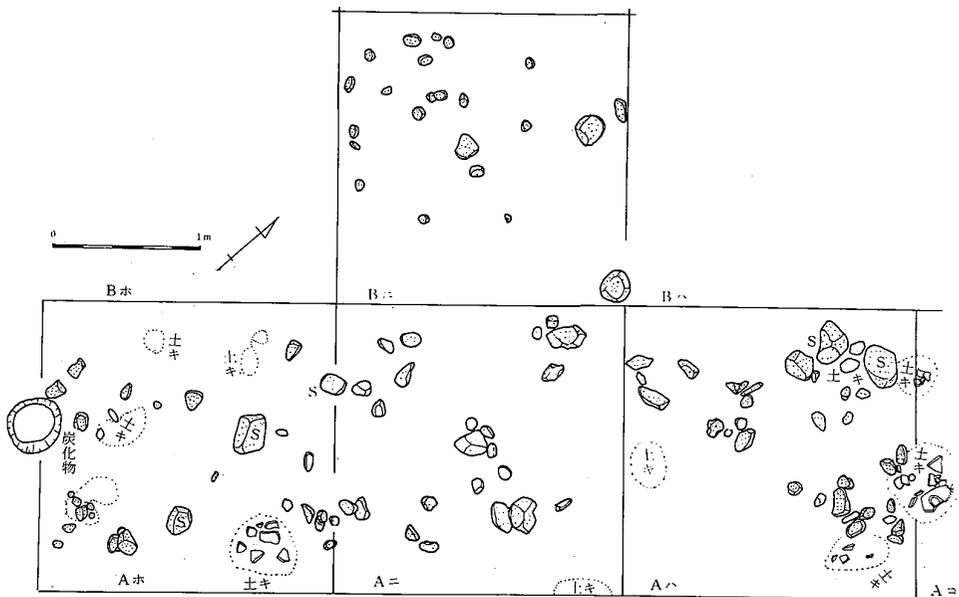
注

- (1) 赤塚長一郎 「山形県上市市牧野遺跡調査略報」 山形考古 第3号

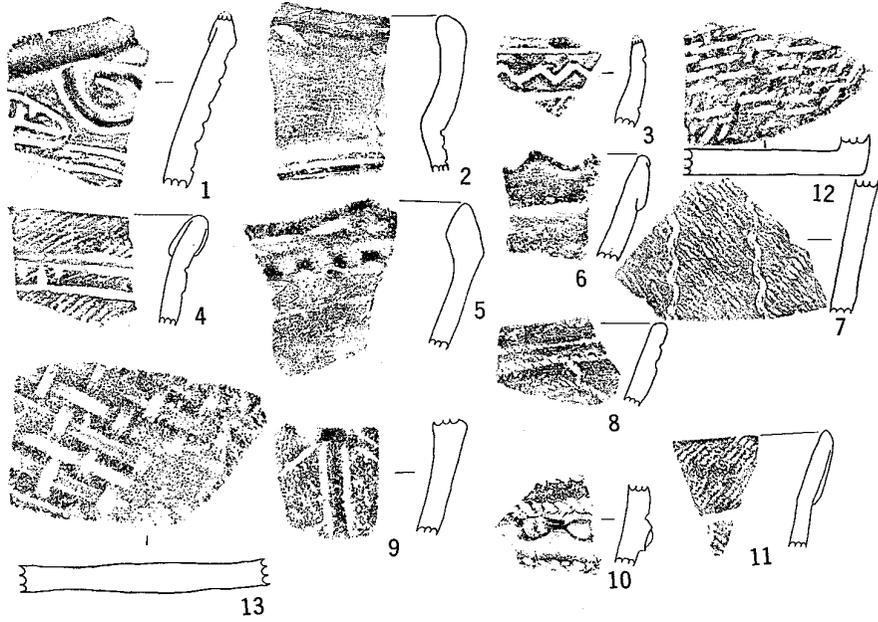
第19図 Aイトレンチ北壁セクション図



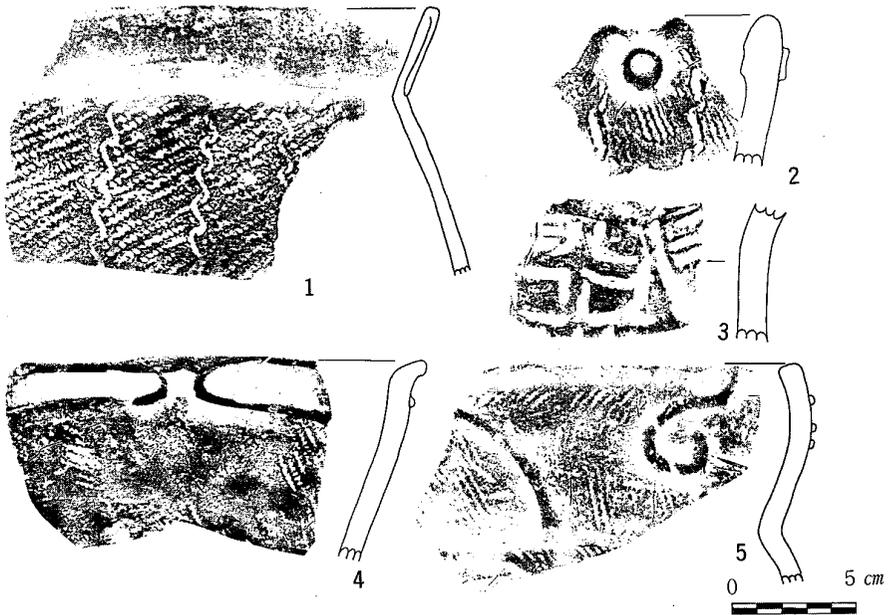
第20図 住居跡 (Aトレンチ)



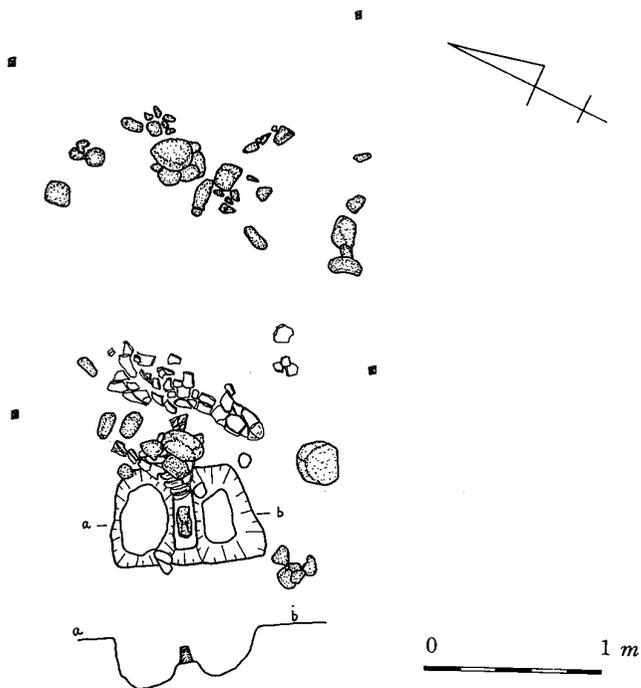
第21図 住居跡ピット付近出土の土器



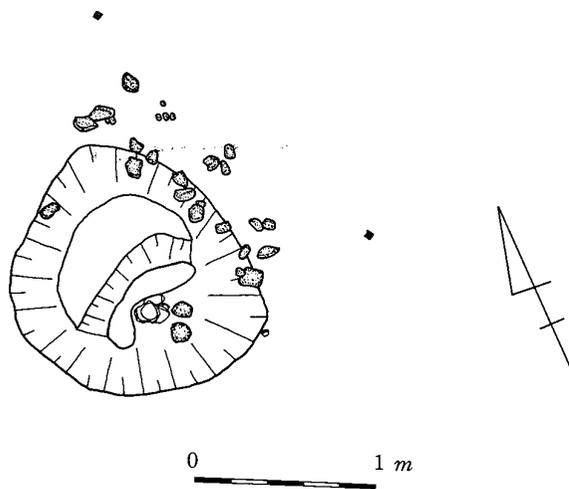
第22図



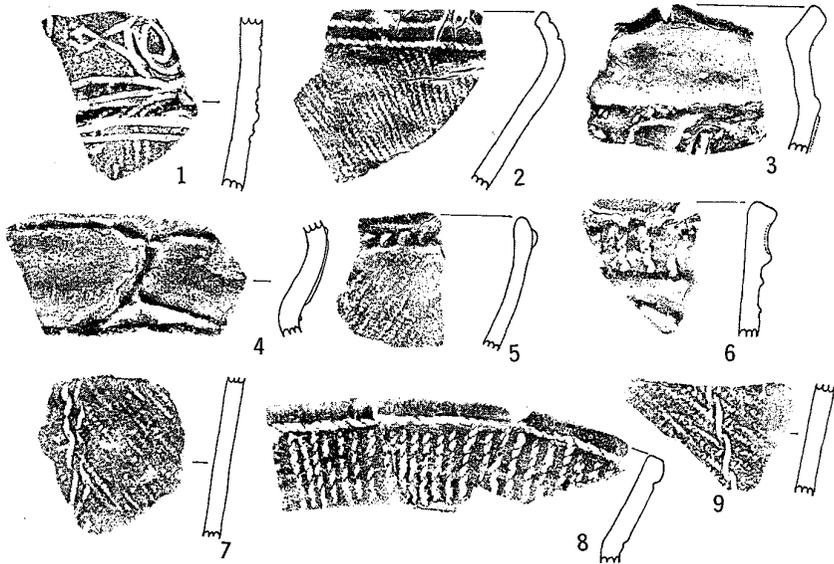
第23図 土壇〈その1〉



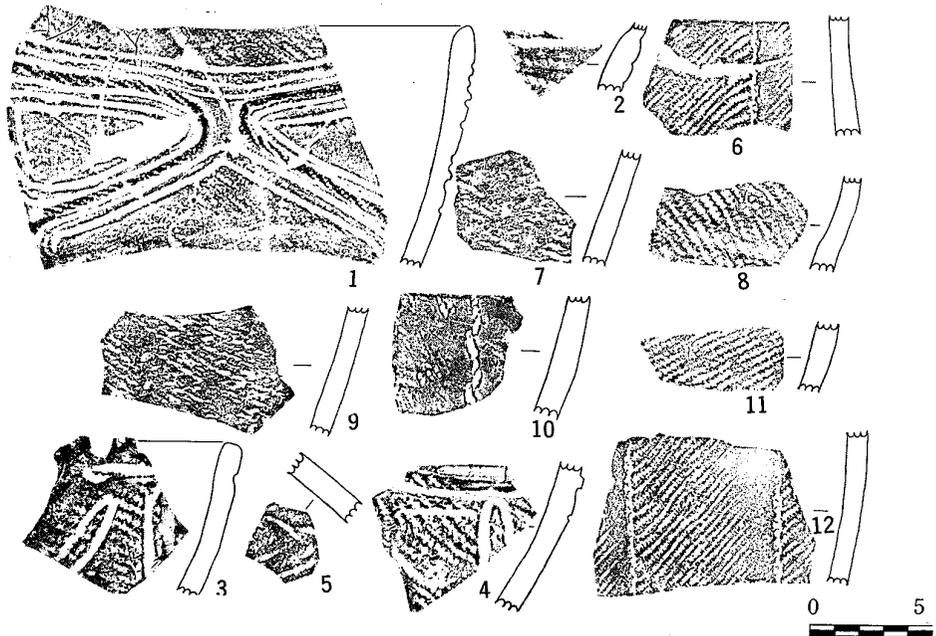
第24図 土壇〈その2〉



第25図 土坑〈その1〉出土の土器



第26図 土坑〈その2〉出土の土器



VII 総 括

縄文中期初頭を東南北半では大木7 a、7 b期をさしているが、山形県内においてその型式の特色は必ずしも明らかでなかった。昭和30年代のはじめ、獄原遺跡や長井市宮遺跡などでは、7 b式期の土器が出土し、獄原遺跡では大木7 aの土器もごくわずか出土した。⁽¹⁾⁽²⁾

当地方で、大木7 b期の土器を区別できたのは、7 a期は折り返しまたは複合口縁で、口縁と体部の斜縄文が左右反対の方向に流れるということである。大木囲貝塚などでは、体部に綾絡文が縦に走るものも認められるが、当地方ではそれだけをとって7 a期とされないのである。体部に綾絡文が縦に走っていても、口縁が波状で、竹管文、爪形文、撚糸押圧文があったり、総合的に判断して、大木8 a期のものにもみられることがあるからである。このような例と同じように、他の文様をとりだしても、他地域の7 a期の型式部や部分的にしている場合があって、当地方における大木7 b式併行期のものはかなりの巾があるようである。市のある大木7 b式併行期の土器について、本遺跡では土器の種類と量が多いことから10の分類をし、今後の研究の手がかりにしたいと提案してみた。

石器及び石製品については、石鏃、槍、石匙などいわゆる定型的なものと、ナイフあるいはブレイド的な作りの粗な不定型の石器が現われている。いずれも頁岩を材料としているが、後者は、中期にはよくある例である。大木8、9式期にもあるがすでに、中期初頭からみられるようである。凹石などの石製品については、一般的である。定型、不定型の石器にはなっていないが、黒曜石が2点出土している。本遺跡がある須川上流でも黒曜石の石鏃が採集されており、上流の蔵王南麓にもその原石が出土するのではないかと推定される。そのほか山形市熊ノ前遺跡などでも黒跡石がみつき、蔵王山の北山麓にも原石があるらしいことがわかっている。⁽³⁾

さらに、本遺跡で注目をひくものとして、土製器がある。土製品には三脚土製品、耳栓、土偶の三種類がある。

まず、三脚土製品についてであるが、その出土時期は、大木7 b期からであることは前回の調査で明らかになったが、今回もそれが証明された。新潟県などでは馬高期から、福島県などでも中期、秋田、宮城県などでは後期頃の遺跡から出土している。⁽⁴⁾

その用途については、成島遺跡⁽⁵⁾などに多い三脚石器とにているが、直接的には関係なく考えていきたい。三脚石器も中期初頭から多くなるが、これは利器としての性格が強いからである。これに対し、三脚土製品は、利器とも器とも考えられない。東北地方の三脚土製品を集成してみると、本遺跡では、小突起が1つついているものもあるが、宮城県や新潟県などでは2つついているものもある。時代は明確でないが、乳房状突起らしく、粗製の土偶ににってくる場合がある。文様なども、本遺跡や山形市百々山遺跡をはじめ、他県の土製品をみて土偶に似たものが多い。

出土状況では、土地と直接結びつくかどうか疑問であるが、その付近から出土したことなどは、32年の調査と合わせ宗教的性格のものに結びつけて考えたがる要因がある。

以上のようなことから、三脚土製品については、宗教的、護付的な遺物と推定できるが、女性像との関係はどうか、もう少し資料がほしいところであり、断定できない。

土偶は今回も1体出土しているが、時代を反映した女性像である。それに、耳栓は、太鼓形に近いような大形のものまで出土している。本遺跡は、三脚土製品から土偶、耳栓など宗教的、装飾的土製品が多いという特色がある。

次に、遺構と遺跡全体の性格はどうだろうか。土坑〈その1〉のように貴重な資料を得た反面、獄原遺跡や長井市宮遺跡の住居のように明らかにならないことや、土坑〈その2〉が1個だけなのか、土坑〈その1〉は住居や集落のどんな位置にあるかなど課題が大きい。

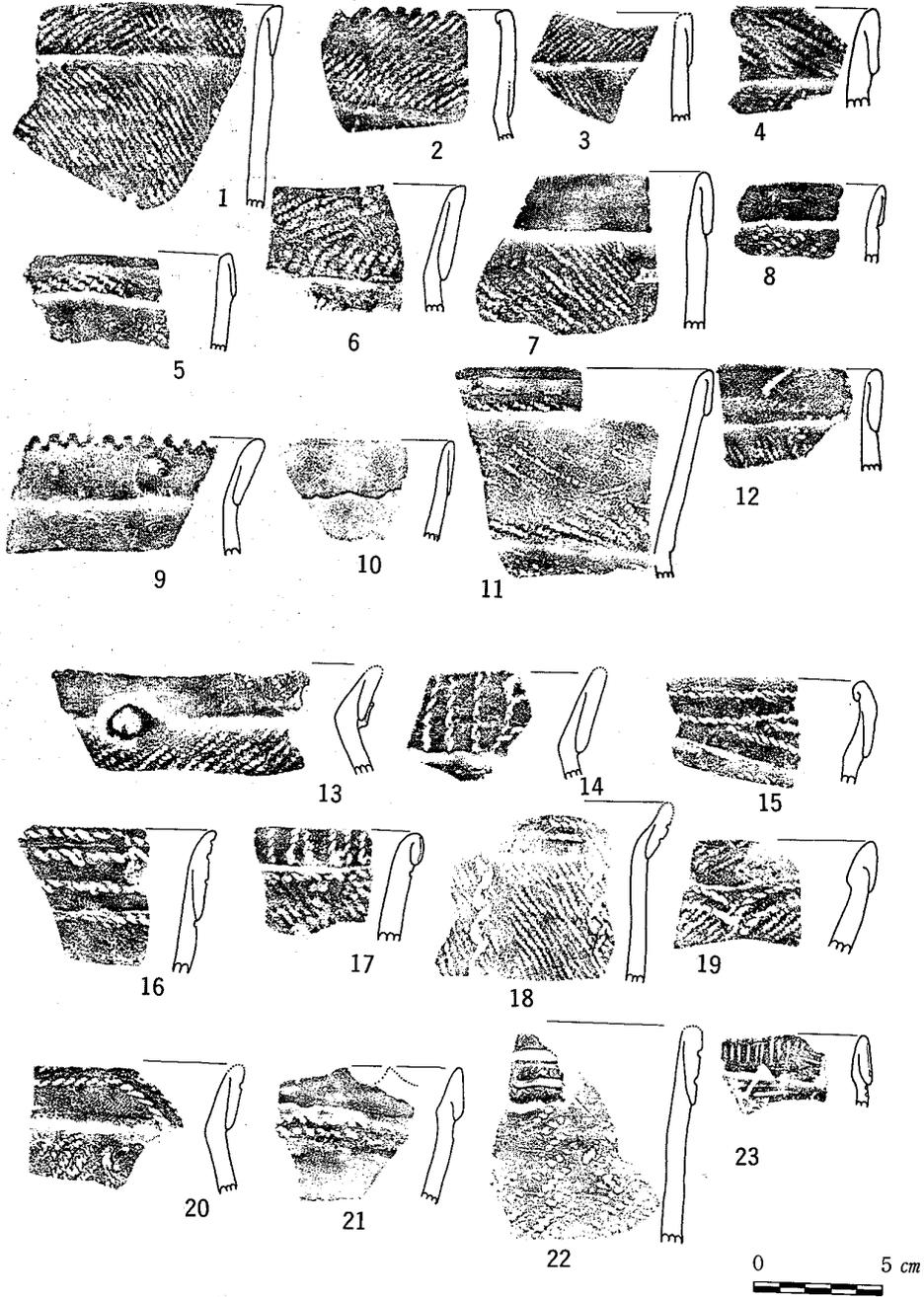
いずれにしても、縄文中期初頭の問題に予測をもたせながらの具体的な課題を提起したものと受けとめてみたい。

注

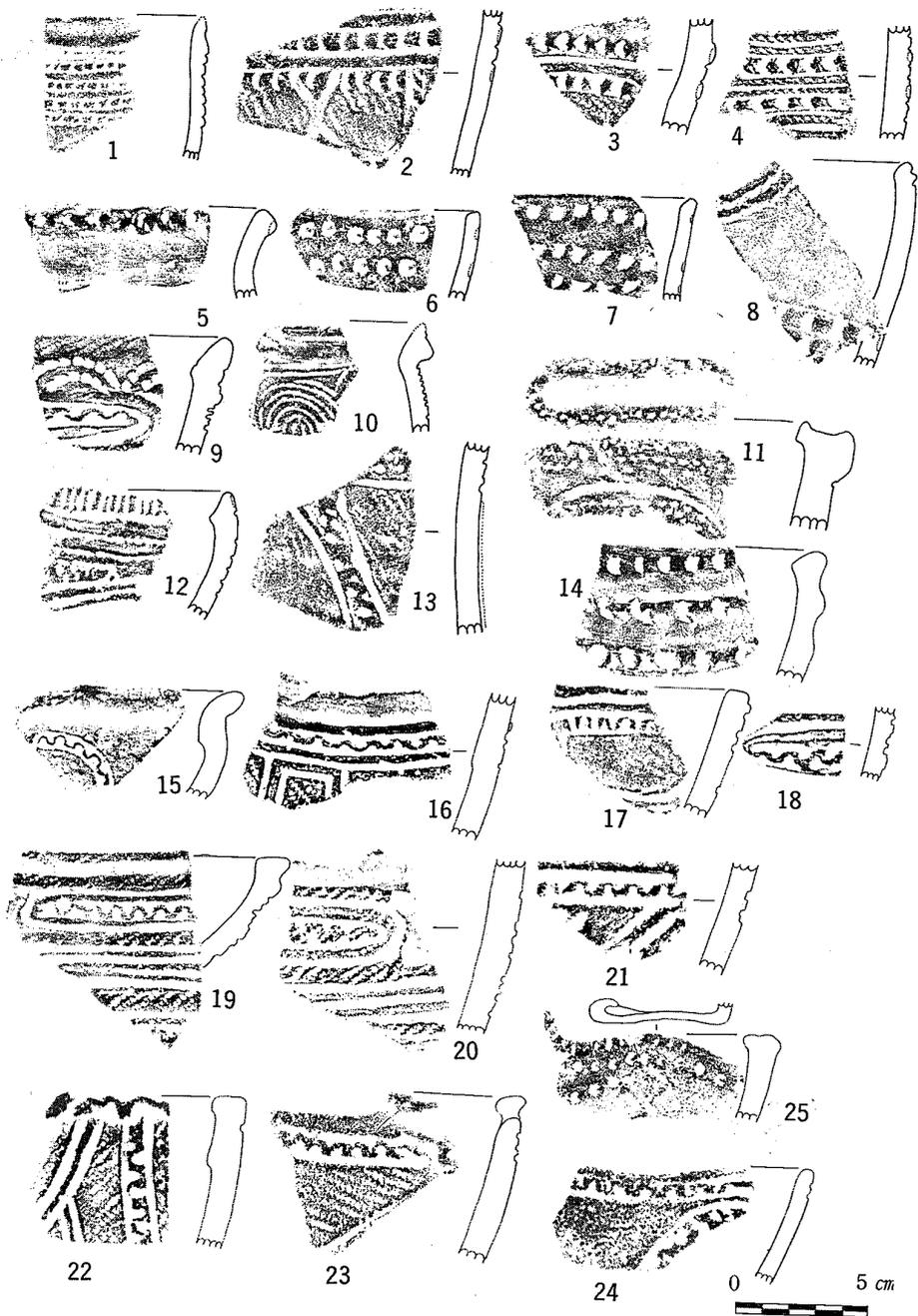
- (1) 赤塚長一郎「山形県東村山郡山辺町獄原遺跡略報」山形考古8号 昭36年
柏倉亮吉、赤塚長一郎「山形県東村山郡岳原遺跡」日本考古学年報13 昭40年
- (2) 柏倉亮吉ら昭和31年調査 住居跡については山形県教委刊「岡山遺跡」に一部掲載されている。
- (3) 近刊 柏倉亮吉、赤塚長一郎、小形利彦「山形市熊ノ前遺跡」(第1次)山形市教育委員会刊
- (4) 寺村光晴「所謂三角形球面状土製品について」貝塚64号
栃尾市教育委員会「枡倉遺跡」同委員会刊
- (5) 赤塚長一郎「三脚石器について」山形考古1号 昭32年
江坂輝弥「土 偶」昭和35年 校倉書房

版 图

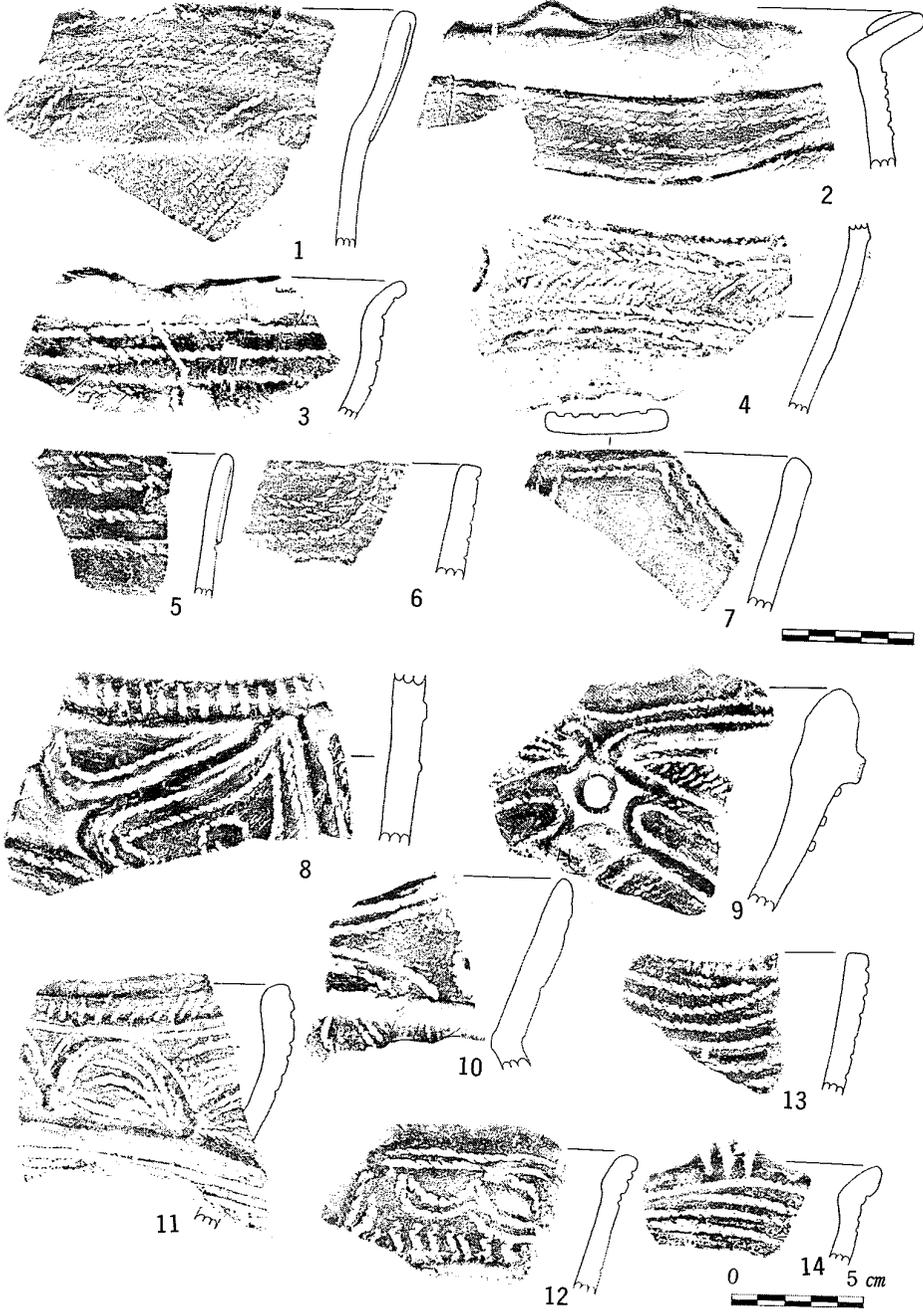
第 6 图 土 器



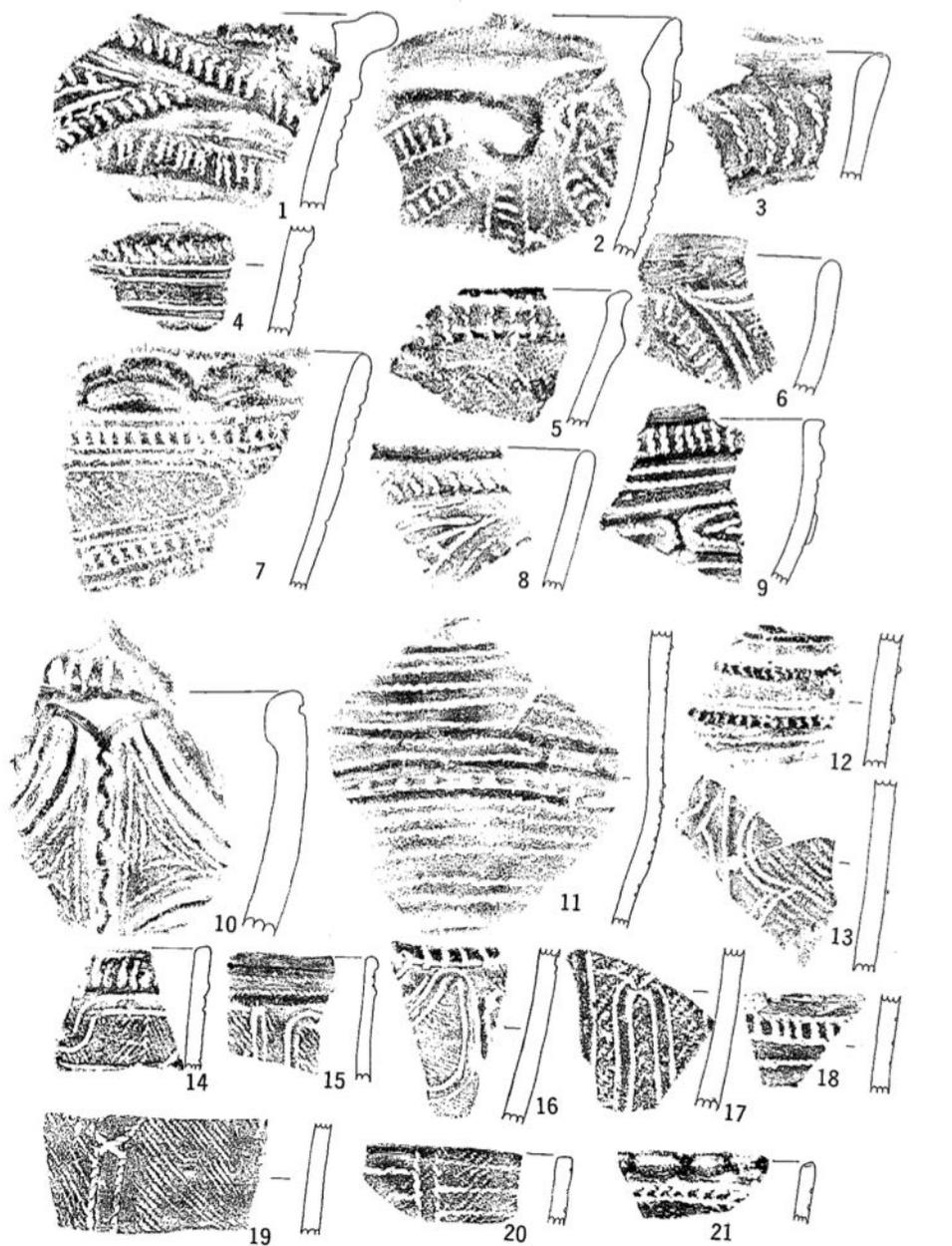
第 7 图 土 器



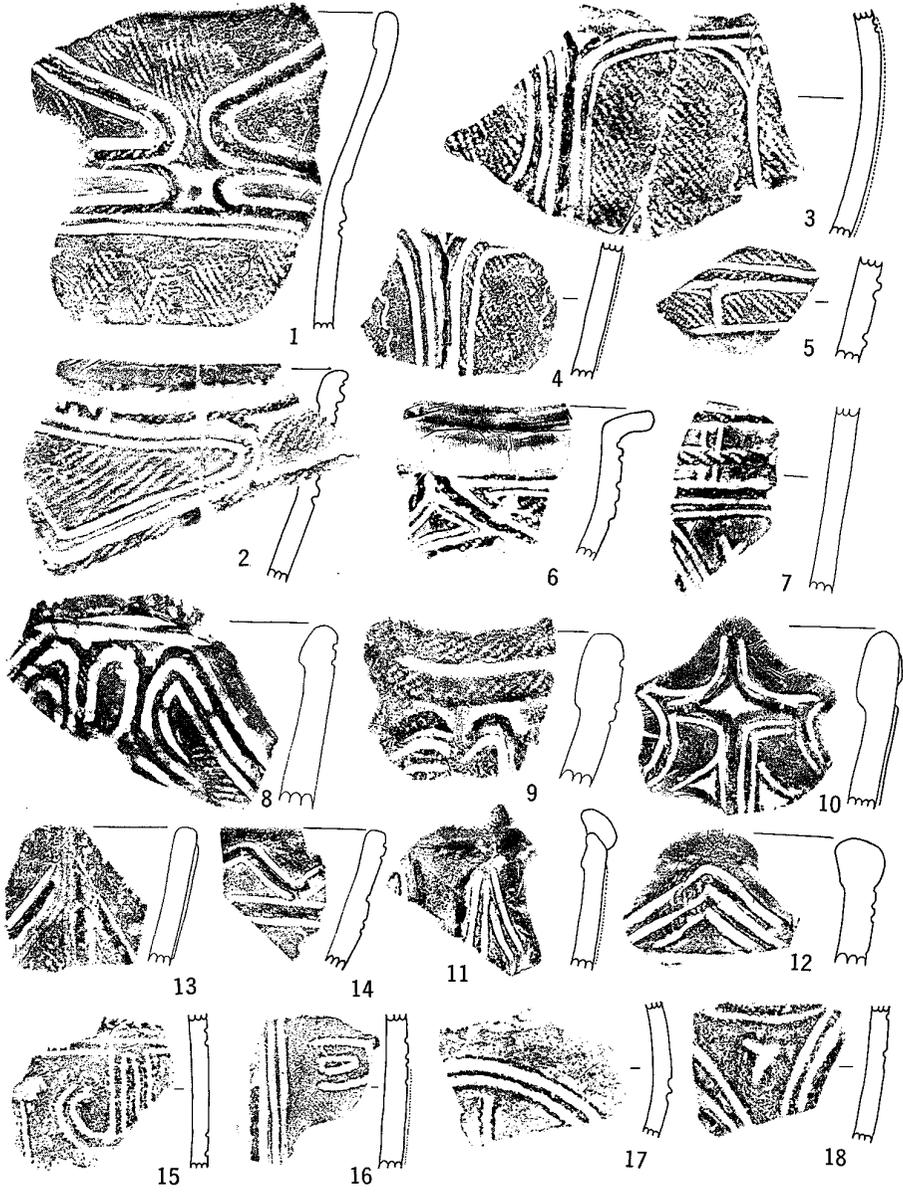
第 8 图 土 器



第9图 土器

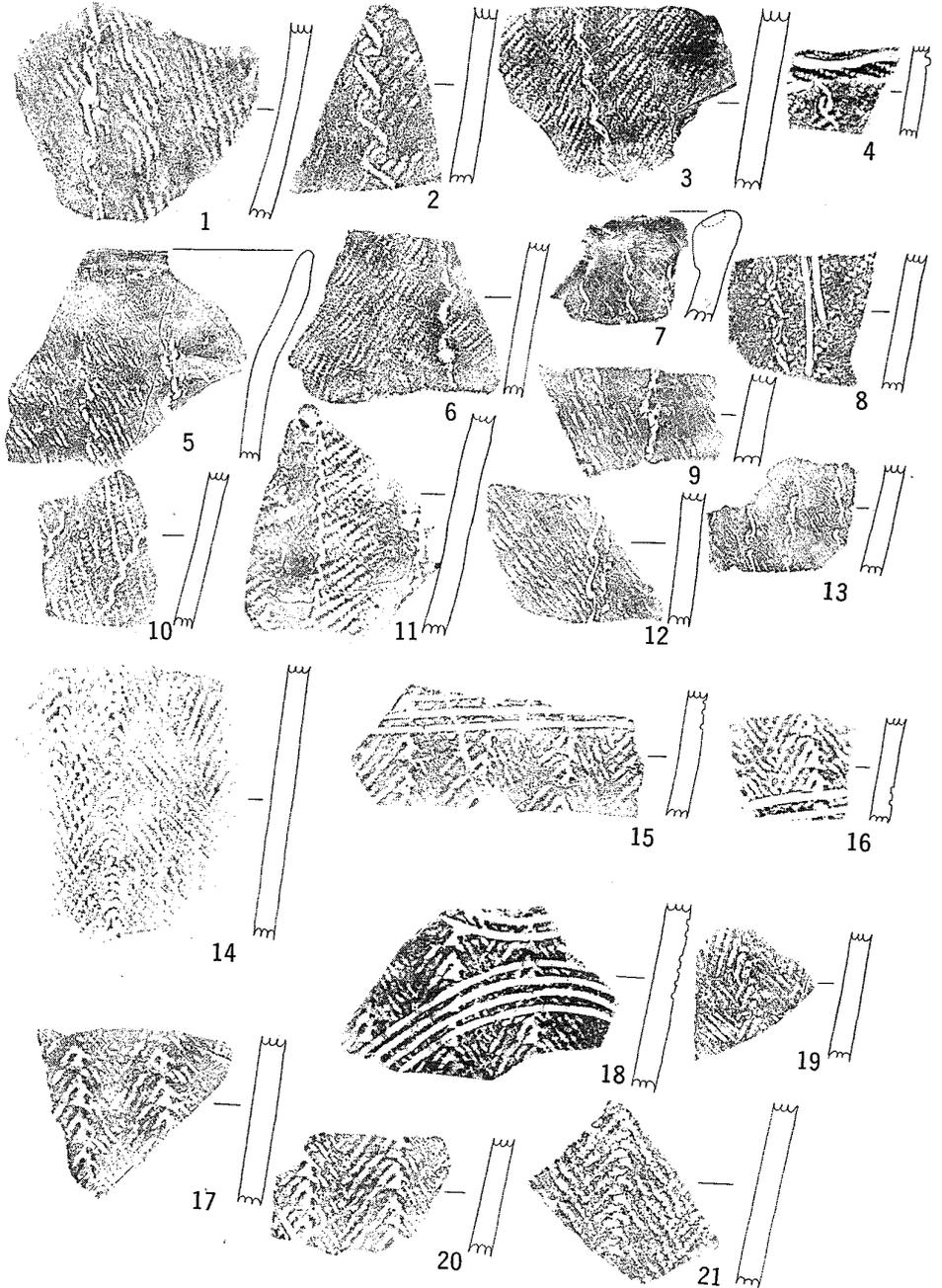


第10图 土器



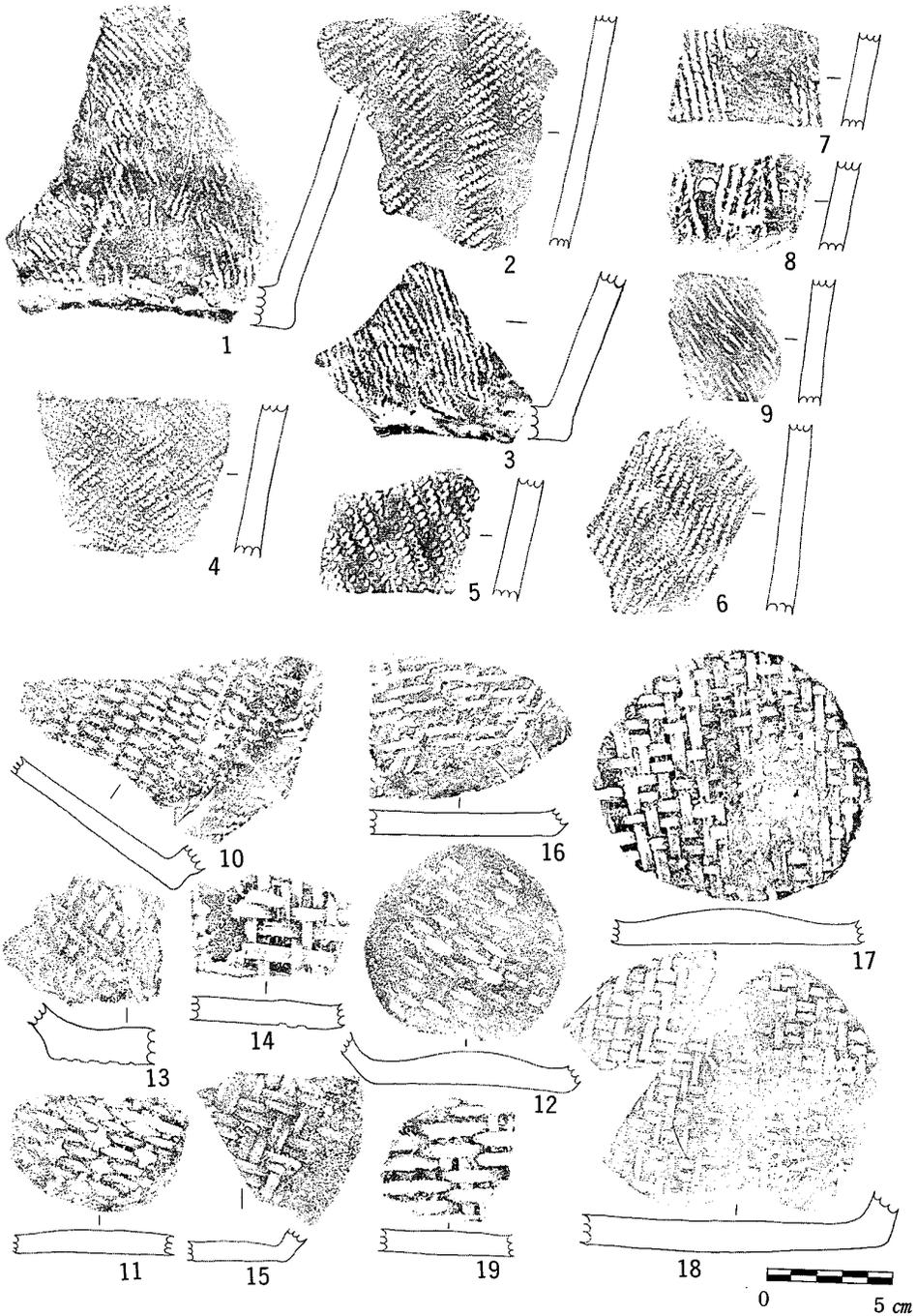
0 5 cm

第11图 土器



0 5 cm

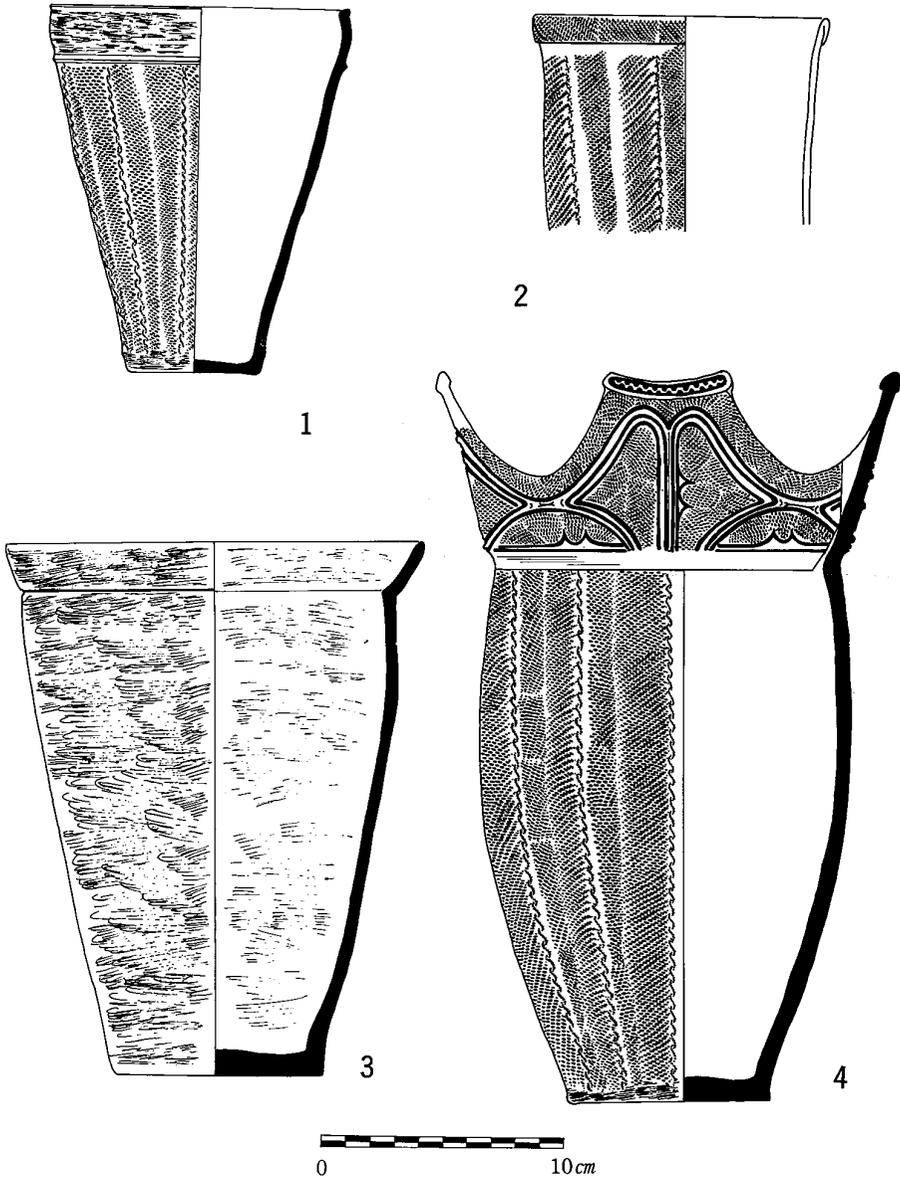
第12图 土器



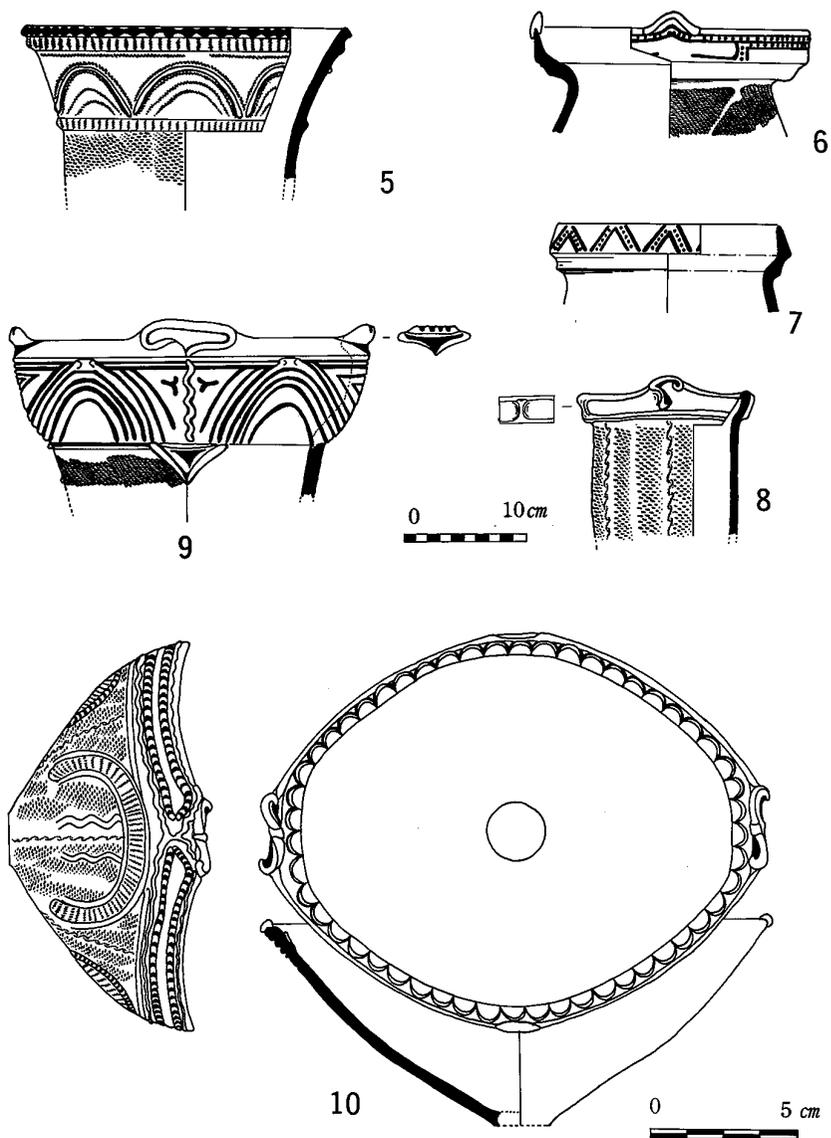
第13图 土器



第14图 土器

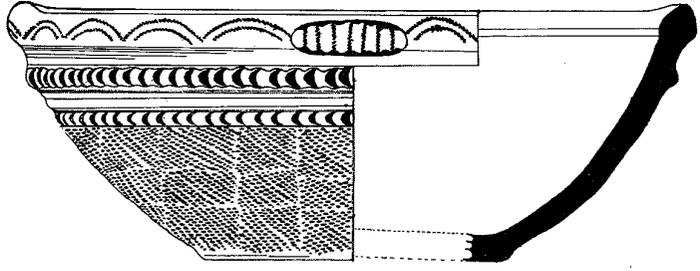


第15图 土器

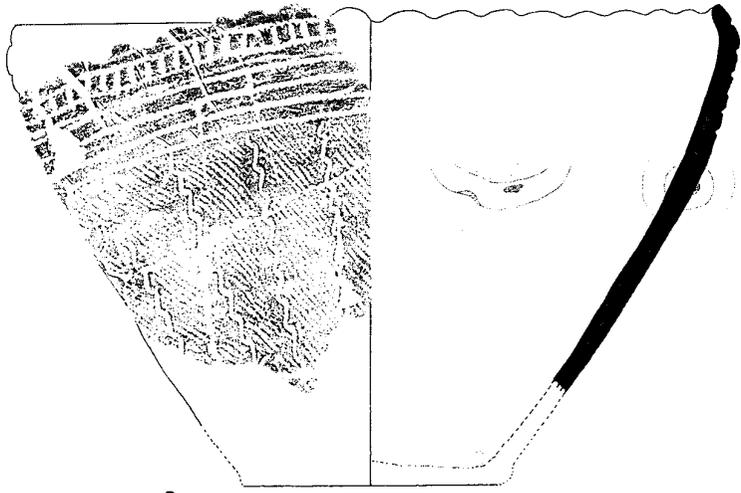


第16图 土器

1953.10.11. 图16



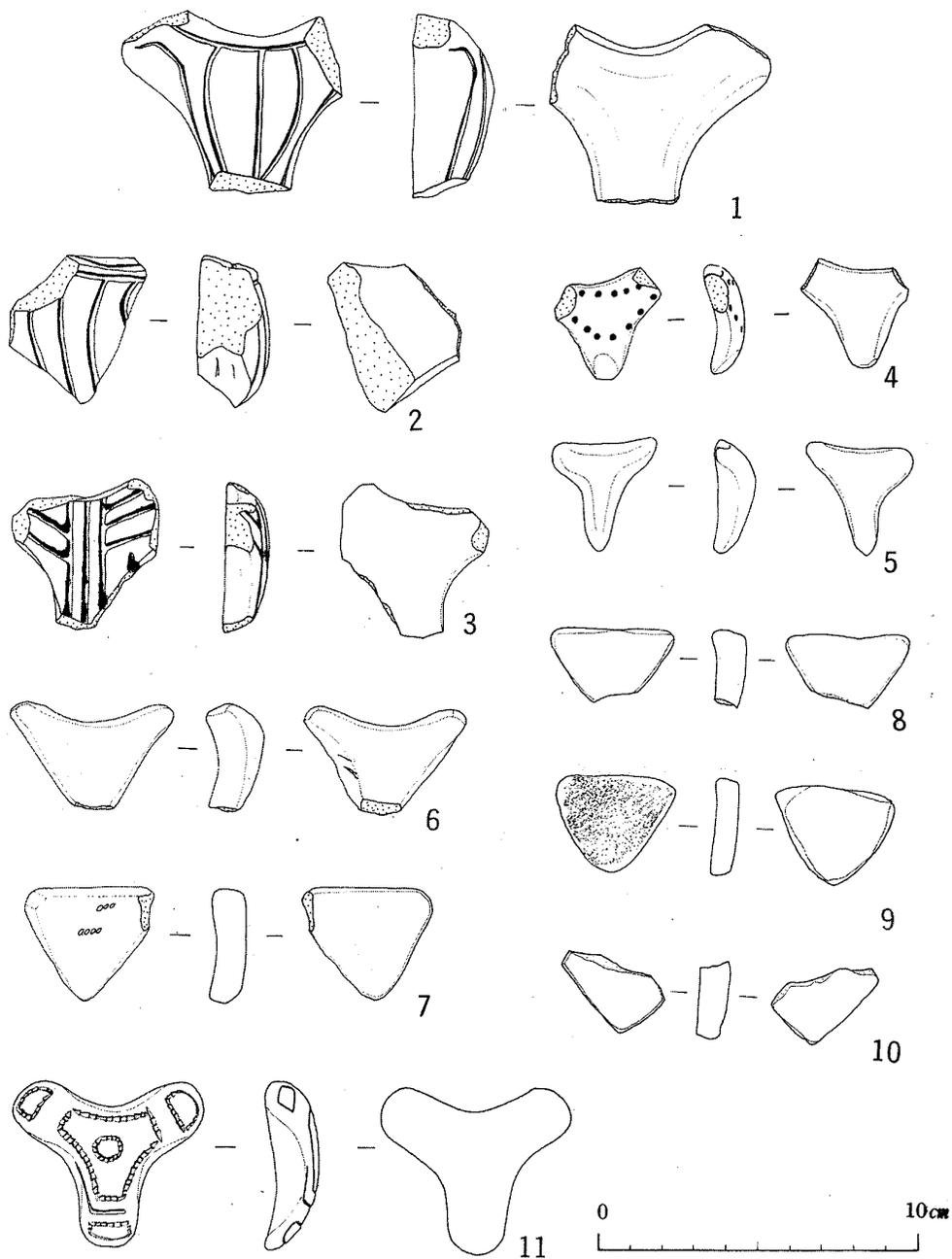
1



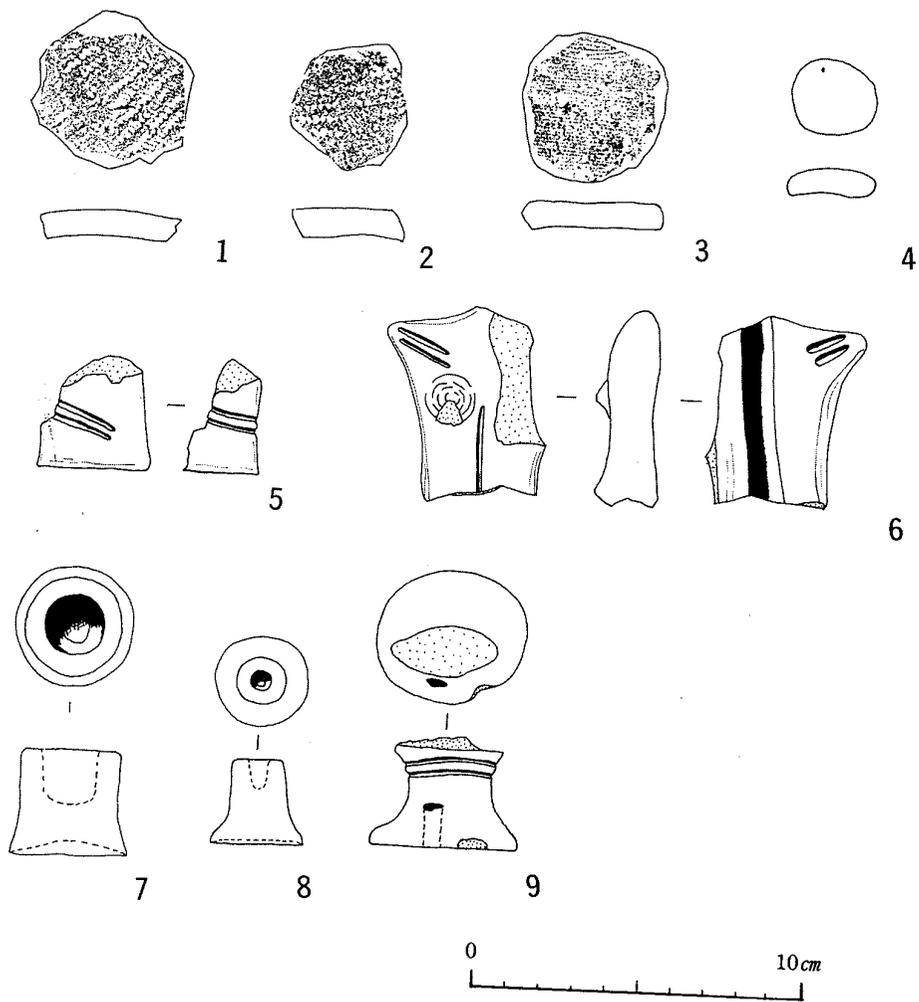
2



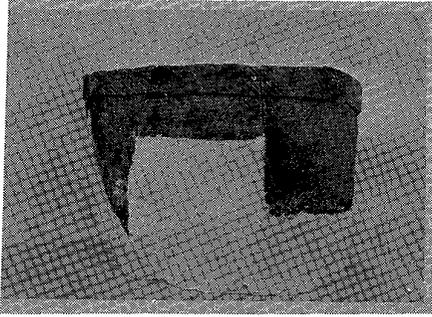
第17图 土製品



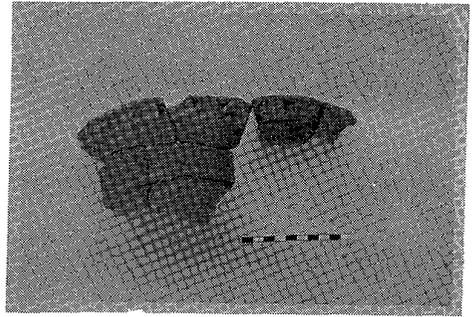
第18図 土製品



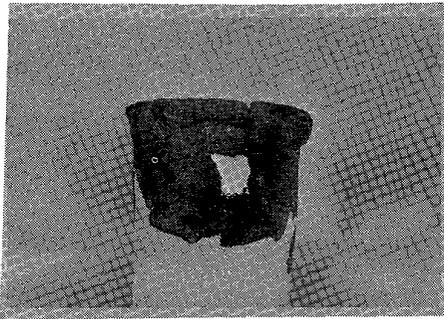
図版 2 縄文中期初頭の土器(1)



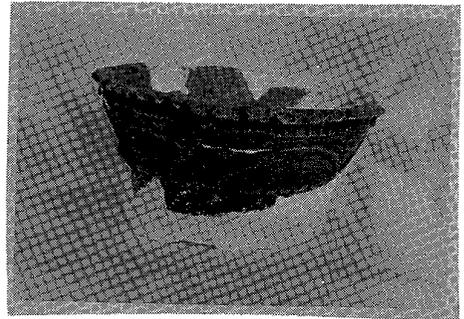
第I群第1類土器



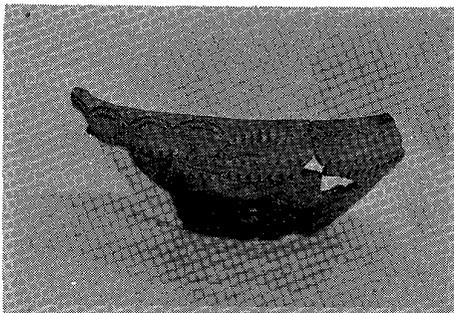
第IV群土器



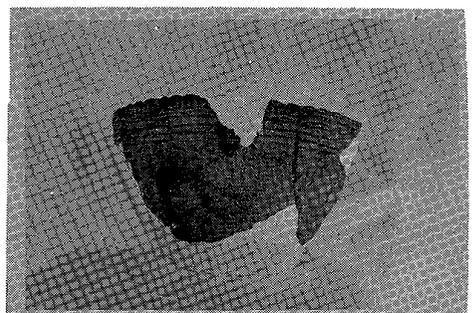
第VI群土器



第III群土器



第III群土器

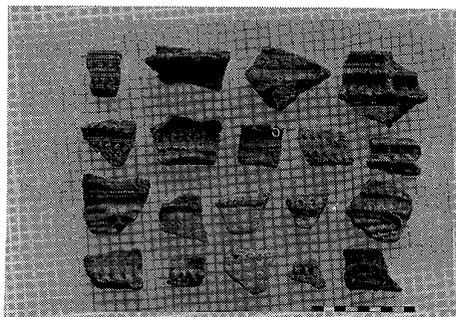


第III群土器

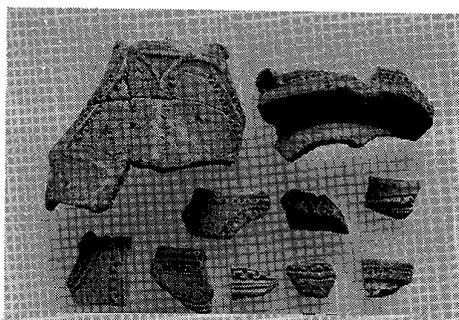
図版 3 縄文中期初頭の土器(2)



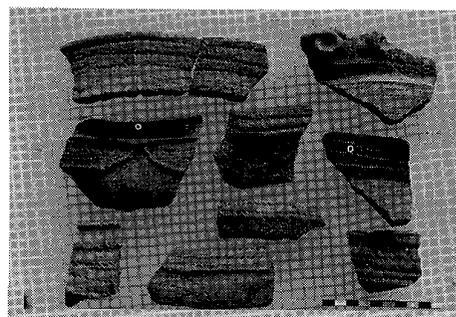
第Ⅰ群土器



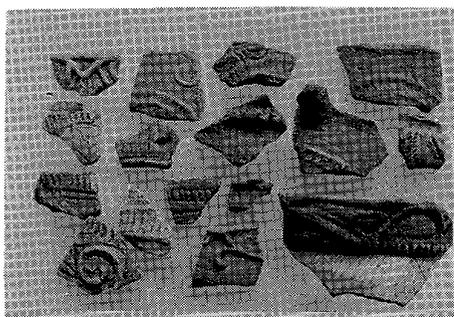
第Ⅱ群土器



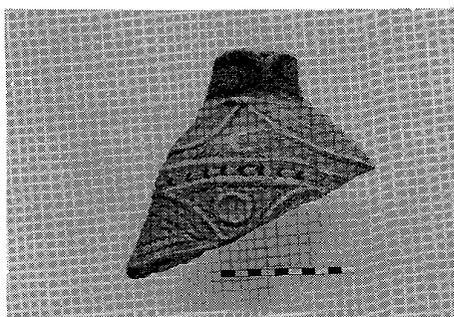
第Ⅱ群土器



第Ⅲ群土器



第Ⅲ群土器

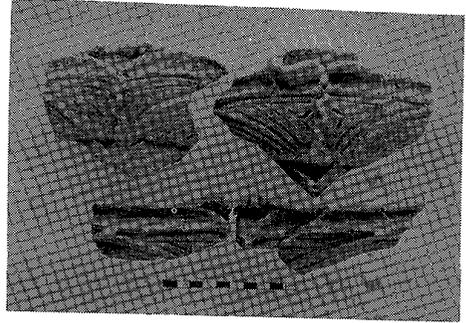


第Ⅲ群土器

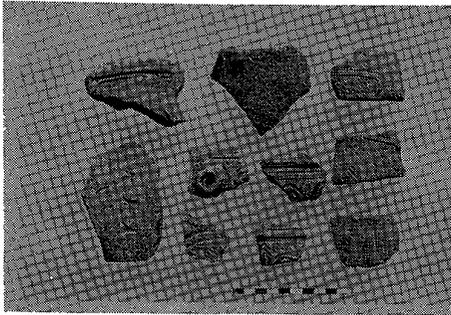
図版 4 縄文中期初頭の土器(3)



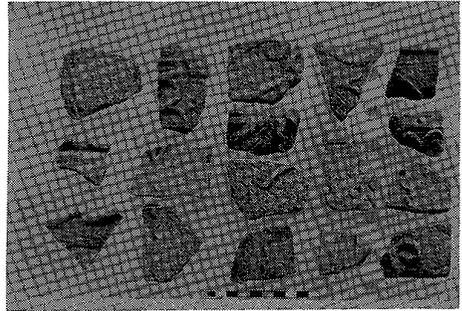
第IV群土器



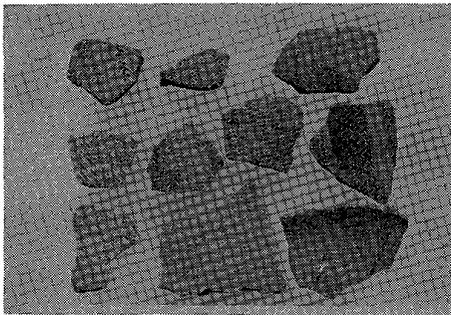
第IV群土器



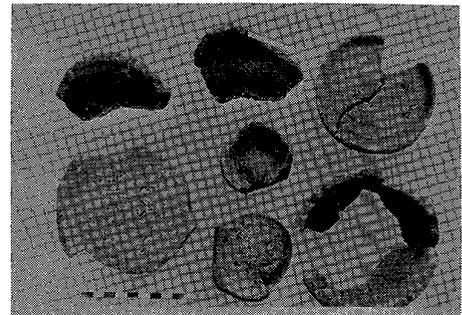
第V群土器



第VI群土器

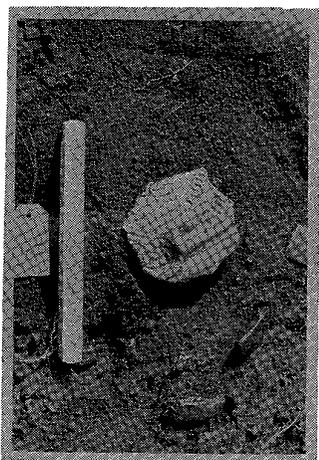
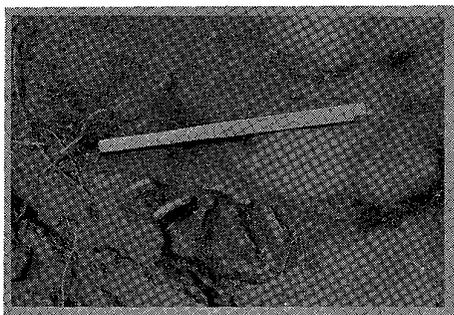
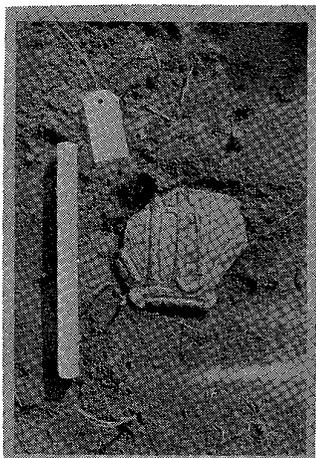


第IX群土器



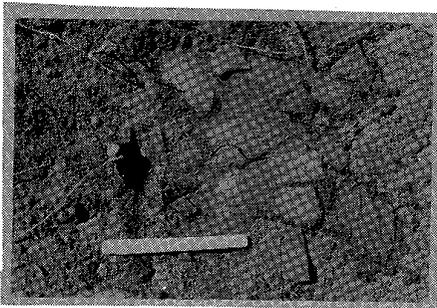
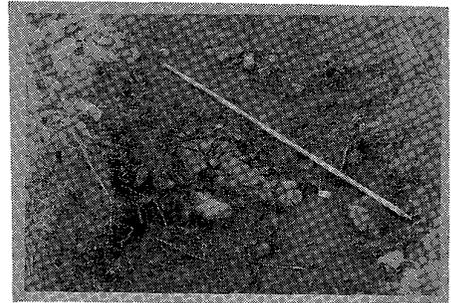
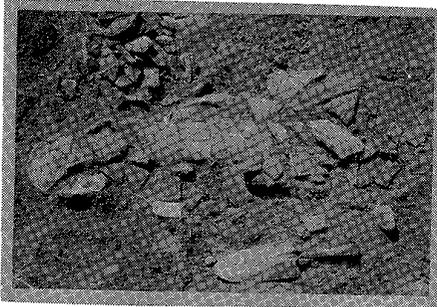
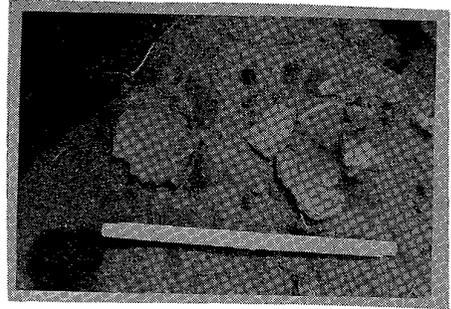
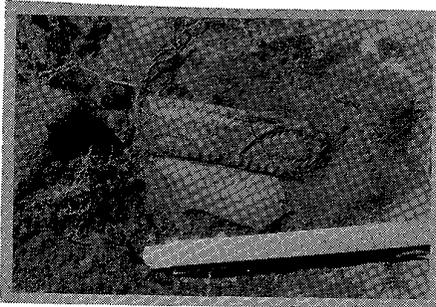
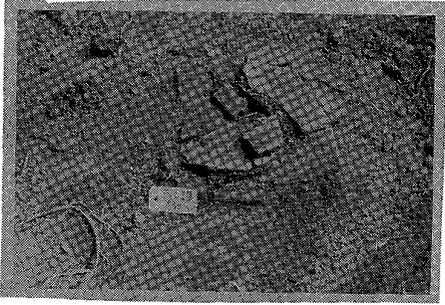
第X群土器

図版 5 土器の出土状況(1)

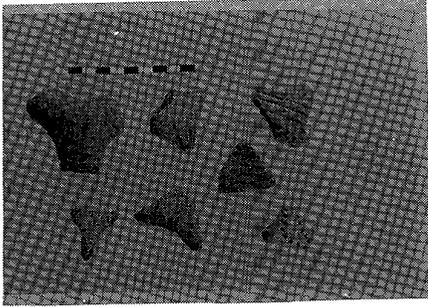


(F-2 Pit 上層)

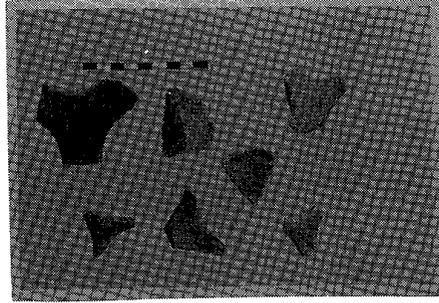
図版 6 土器の出土状況(2)



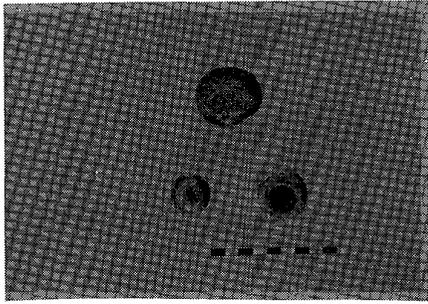
図版 7 土製品



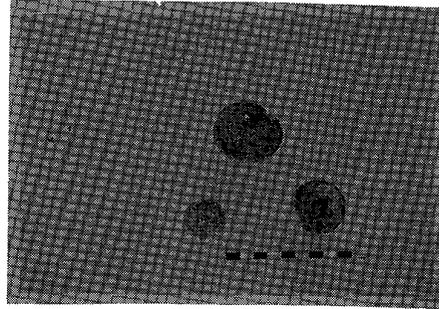
①B-イ I 層 ②A-ニ II 層 ③A-ハ II 層
④A-ホ
⑤F-ニ I 層 ⑥F-ホ I 層 ⑦F-ロ I 層



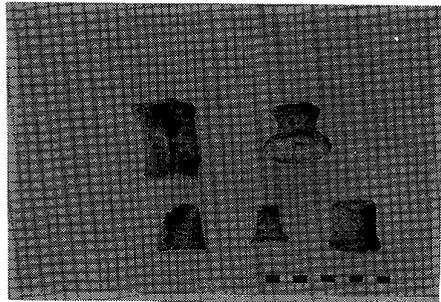
⑧B-イ I 層 ⑨A-ニ II 層 ⑩A-ハ II 層
⑪A-ホ
⑫F-ニ I 層 ⑬F-ホ I 層 ⑭F-ロ I 層



⑮C-ホ II 層
⑯E-ロ I 層 ⑰F-イ I 層

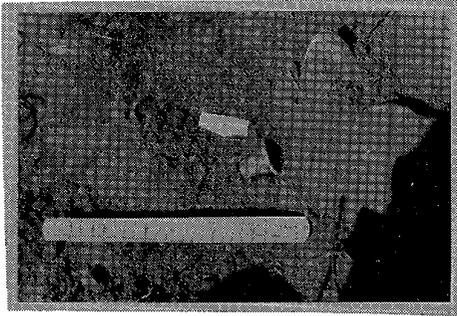


⑱C-ホ II 層
⑲E-ロ I 層 ⑳F-イ I 層

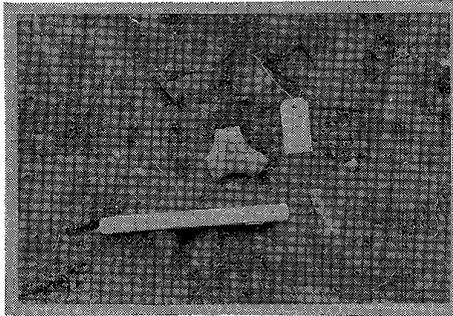


㉑B-イ ㉒C-ホ II 層
㉓E-へ ㉔E-ロ I 層 ㉕F-イ I 層

図版 8 土製品の出土状況



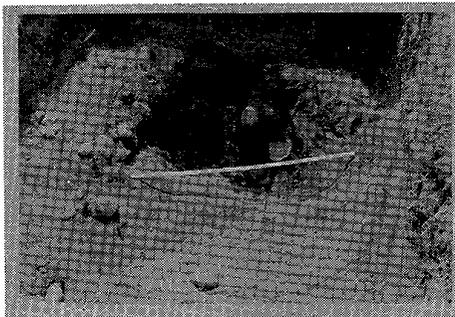
①E-10 I層



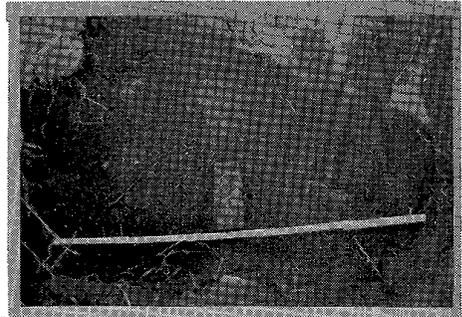
②B-1 I層



③C-1 II層



土 坑



土 坑

上山市牧野遺跡

昭和50年12月25日発行

編集 上山市牧野遺跡調査団

発行 上山市教育委員会
上山市河崎字石崎70番地

印刷 株式会社 上山印刷
TEL 上山(02367) 2-0234